

● HAIKU199801sonoi

煤逃げの地は三浦半島大根台地。
メンバーは横須賀周辺の四人。
裡二名が病み上がりの足弱。
俳句ありてこそその意気投合。

晴れわたる大根台地に踏み入りて
大根台地頭の中も打ち晴れて
君と訪ふ大根台地も二夕昔
大根の胸を傾げて風台地
岬空より大根降りてささりしか
畑はるか大根引の赤セーター
頤（おとがひ）を大根台地の風掠め
風納まる大根台地にヨット殖ゆ
葉隠りに大根台地のうねり
足弱の大根台地の端を踏み
寒菊の臙脂を畑の色どりに
上品に枯れし蔓うめもどきかな
てんとう虫でんぐり返りゐる日向
枯葉には枯葉のぬくみ天道虫
枯篠の間にいつぽん水仙花
膝小僧へ海辺育ちの冬の蠅
冬の蠅音らしからぬ音を立て
岬なればこそその日溜り藪つばき
岬鼻の空に蔓入れ莢ゑんどう
冬麗の拾ひし貝の名を知らず
懸大根海さみどりに風ぎ亘る
切干や海波立つること忘れ
冬麗の貝殻屑を曳きに波
割干に午後から波の納まりぬ
割干に日のゆらゆらと浜日向
割干の割方悪く落っこちぬ
割干の紐に跨り海を前
割干に日の経ち方といふがあり
頬被正月ものの覗突漁（みづきりよう）
被りたる網を突き上げ蛸あるく
揚げられて正月物の大金海鼠（おおきんこ）
浜へ降る路の割干日向かな
年の瀬をひよろつと出でて岬まで

――――
――
インターネット
シンプルにホームページの煤払
数え日の本見つからぬ見つからぬ
傷口も半年を経て枯葉いろ
手術などそんなこんな的一年（ひととせ）
で
養生の去年の足許不如意かな
いてふの木枯れて素性といふが見ゆ
銭湯
脱衣場の逝く年映す大鏡
脱衣場の板敷き踏める十二月
ねんねこに肌着乗つけぬ脱衣籠
脱衣場の観音竹に年の塵
ユリの木の枯るるゼスチュア並木路
家を建つ音の廻りて来る冬至
雨音に偲ぶあれこれ小晦日
とうねずみもちの實逝ける年の空
いま一つ赤らみ欲しき師走雲
横たはり海鼠の如き師走雲
一年の始めの氣息もて起床
年立つとこゑや隣の蒲団より
初日の出喩ふ言葉も立ち往生

新春早々知多半島の尖端にある篠島へ吟行。

東京勢は松崎鉄之介師 宮津昭彦氏など
6名。地元側は6名。島では正月の祭りあり。

魚は満腹になるくらい賞味した。

手術痕胸一文字年立てり

初旅の島で合流三河衆

伊勢海老の伊勢を向うに島泊り

寒木瓜咲く窯元の裏相似たり

土管坂土管の端に水仙花

横腹に知多の朝日よ冬鷗

乗初の胴震ひせる高速艇

何の生簀かんの生簀と知多初旅

淑気立つ鷗の胴の滑空す

四日果て金海鼠（きんこ）色なる鳥羽の空

初刷の匂ひ両掌に移りけり

手術などそんなこんな去年なりし

小寒の酢蔵味噌蔵運河べり

酢造りの蔵と運河と冬鷗

風に乗り五日の酢の香運河べり

正月顔せる皮剥を賞味せり

本島と十あまり東風の離れ島

寒菊の臙脂窯場の横の畑

酔を運ぶ運河往来冬鷗

ひよろろんと雨の四日のとんびかな

起床の師淑気帯ぶこゑ響かせて

伊良古に舞ふ四日の鳶の鷹ならず

紅白の絹莢咲かす島の畑

見夜火堂夜又倍子の実のくろぐろと

見夜火堂は灯明台（灯台）のこと

百合鷗浜より翔ちて伊勢の方

東風吹いてちりめんじゃこの水揚場

正月の祭の寄付に宿の名も

伊勢鳥羽の魚づくしに三日更け

てつちりのこれ何處の骨何處の皮

かがよへる辺り若布の生簀とよ

句碑

春風の島を詠ふか山頭火

明日葉の島に四ヶ寺遍路みち

冬日向土管土管の坂なして

六日まで蓑虫籠り決め込みぬ

淑気立つ鳶の羽打ちも知多巡り

心臓の直しが利きて旅始め

敷石も常滑焼の外廁

土管坂土管ばかりに冬ぬくし

冬麗の知多をびゅうーんと高速艇

満腹やこれがとどめの河豚雑炊

正月の魚食べ放題の宿

初夢におこぜ等夕餉の魚たち

段積みの常滑焼酎瓶に冬日

捨て積みの焼酎瓶に冬の蠅

魚食はす宿の帳場に繭団子

揚舟を洗ひ四日の島の雨

明日葉の道を巡りて島弘法

島弘法は島内八十八ヶ所にある石仏を称

して

住み着きしは天保年間とぞ凍み鶉

島の闇弊もおどろにおわたりさま

おわたりさまは正月三日の夜女宮より

男宮への神渡御の神事。御神体は毬状

の幣の塊。獅子頭と島人称す。

冬三日月男宮詣での篠島衆

神明神社

三日の灯入りて男宮の常夜燈

常滑の土管色して冬の菊

御幣鯛（おんべだい）献上の島初日さす

御幣鯛は伊勢神宮へ献上の干し鯛

正月の潮の香しばし渚べり

高速艇伊良湖・水鳥横っ飛び
寄せ棟の酢倉掠めて冬かもめ
窯主がまけて三日の湯呑みの値
半田運河昔日
酢を運ぶ舟の往来冬鷗
醸造元飯桐の実のたわわなる
三日果つ宿の前にも島弘法
てつちりやお酒とろとろやりながら
伊良湖鳥羽烟りて四日明けにけり
正月ものさぎゑにお膳賑はへり
水仙を剪りて四日の島の畑
渚べり竜宮様へ注連十あまり
振り分けに水仙島の馬の背みち
伊勢海老の出し汁四日の朝餉なる
河豚の皮摘みぽつぽつ渡御の由来
地図好きの方と初旅して三河
砂浜に注連の十あまり神饌の道
そら豆の開花を絹莢促せり
櫟の若木潮風払ひけり
初東風に島はめでたの大漁旗
校長駐在正月祭の附き人に
祭り見に宿の女将の春小袖
初東風や鶺鴒木（おたなぎさま）の潮垢離に
鳥羽の方向きて樹頭の冬の鳶
霜枯れの菜っ葉を摘みに島の婆
初東風吹く島を歩いて脚養生
七種の富士はずしろ色をして
河豚鍋の河豚の唇食せといふ

誌上

歳旦吟古風当風張り合ふて
 心臓のポンプ順調去年今年
 隆起せる傷跡撫づる寒の入
 古傷をつゝかれしごと鴟啼けり
 雪上をゆく養生の足はこび
 桜の枝載せをる雪のかたちかな
 昼の雪雨に溶けゆく窓明り
 雪のビルの谷間行く人ミニチュアめく

鎌倉七口の一つ朝比奈の切り通しより
 鎌倉に入る。養生の足の鍛錬なり。

朝比奈峠越

氷つく切通し経て鎌倉へ
 朝夷奈の岩盤氷るあばた面
 崖水柱こたびは何の下知飛ぶや
 黒凍みの落石朝夷奈切通し
 切通し上り下りの朽葉坂
 水音の水音たるを朽葉沢
 もう一段目線を上に藪つばき
 朽葉瀟す清水水音のいよいよや
 日陰雪ずんと朝夷奈切通し
 切通し岩石剥いで氷柱落つ
 枯蔓のずるずる引けて土埃
 はばたいて桜の芽立ち促せる
 枯蔓のやみくもをまのあたりかな
 枯蔓の嘗ての一途なべて見ゆ
 見当がついてこの枯れ尽きし蔓
 こと切れしごとく枯蔓宙吊りに
 ターザンが目をつけさうな枯蔓も
 裏白に風来て動く切通し

山清水鳴れり朽葉を潜り出て
 冬清水奏づ音色に葉の朽ちて
 冬の清水音色もろとも掌に汲めり

杉本寺

方円に氷るものたち境内に
 閼伽棚の水の氷りて方円に
 春塵の分厚く赤茶け煤仁王

日の申し子蓄の素心臘梅に
 柿の葎通用門を出でにけり
 この寺の鯉を封ぜし厚氷

葉山ご用邸の近く旧葉山役場の裏
 より端山に登る。大風の日なり。
 富士を真正面の尾根筋道。

風に乗る手際宜しも冬鴟
 如月の鴟の胴体ほれほれす
 別当時化梢に梢打ちつけて
 大寒の濤に利きをる濤殺し
 べつとう時化鳶大胆に急降下
 大寒の波起ち上がり起ち上がり
 潮風に揉みにもまるる藪つばき
 浅春の波波波をおっぺして
 走り根に灘も春めく波明り
 青木の実潮騒途切れては聞こえ
 春はゆつくり寄せ来る波のいぶし銀
 枯蔓にいちにち相模灘の照り
 強東風に鳶の平行移動せり
 湾内の空中に鳶鱈東風
 その先を濤のさ走る藪つばき

藪椿落ちて真下の藪を打つ
大寒の富士へ真向かふ尾根筋道
椿林展け正面相模灘
きさらぎの白樫の葉をめくる風
波明り差し込む二月の雑木林
きさらぎのつわぶきの葉のいぶし銀
寒風に磯の木が哭く相模灘
別当時化ぶつかり磯の木々哭けり
冬茜雲の色合ひ愉しめり

大岡山の梅園に妻と散策。
ちよつぱり早かった。

紅梅は蕾のうちの真くれなゐ
紅梅の目先の花より奥の花
紅梅は生菓子ほどの湿り得て
寒紅梅たった一輪干菓子に似
紅梅に戻りて目線やはらぎぬ
白梅の枝伝ひなる谷戸の風
天神の梅に謝すこと多々ありて
紙づつみほどける音を白梅に
抱へ来て観梅の座の新聞紙
紅梅の蒼近々頬っぺいろ
紅梅の幹はとみれば年期もの
瞬きてはつきりさせぬ淡紅梅
白梅のはたと膝打つ明るさに
はるかにて雛あられめく淡紅梅
梅の木に鳥の乗り降りきびきびと
二ヶ月の土搔き植うる球根は何

さぞやとはおもふ金縷梅花了へて
きな臭き八幡宮の枯公孫樹
日当たりが好くて芯まで枯る雑木
日陰雪堂より洩るゝなみあみだ

寒木瓜の丈余真つ直ぐ本堂へ
寒鯉の流れに列を整へる
十一面観音（じゅういちめん）さんへ竹林
凍る中
石鱈玉吹ける少年ベランダに
桜古木浅春の日を枝々に
枯れきつて病巢見する桜かな
臘梅に日は蜜々の寺門脇
大公孫樹てっぺんに枯れ及びけり
こんなにも温きものは冬帽子
寒鯉の頭を振りて向き変ふる
春近く桜の幹のいぶし銀
いっこく者の如き床擦れ冬至湯に
木雫や風と氷の二月果つ

春水の日向に出でて網目状
春の川流水ここに来て光る
川いっぱい使つて春の水ながる

近郊の丘を妻ともども巡った。

春雪の残りが山寺の薬師堂の裏に残って

いたり、木五倍子がこまやかな芽をつむいで

いたり、丘より流れ出づる春水の音色に

春爛漫のおもいを目前にした。

神武寺より鷹取山へ

春草の顔覗かせぬ駐車場

すれ違う人の云へる

ふきのたう穂高登りの足慣らし

枯蔓の吹かれて鳴れる一雑木

優形（やさがた）の春の蠅来て止まりけり

三極の蕾蕾の宙にあり

宙吊りといふは蕾の三極に

枯れざまの幹のこれこそ山桜

山歩き日永の岩棚伝ひなる

春の水音を殺して岩に

通院の段差ある路日脚伸ぶ

もう土に還る彩して落椿

北面に目を瞪ける藪椿

うぐひすのこゑ裏白の谷登り

春水のところどころに翳もてり

春鴉の対す彼方に海のあり

林立して仏頂面の枯櫟

接骨木の芽と手を添へて申さるる

枯桜幹は金泥帯びにけり

かがよへる春雪を置き薬師堂

蠅の子の日差しに翅を温めをり

山菜萁の綻び初めしより諸々

春日差し受けて磨きのかかる幹

今落ちし椿花卉の反り深し

芽の顕ちて桜そろそろ混み来たり

春水の面見てゐてうとうとす

てぐす病梢（うれ）に及びぬ枯桜

三極の蕾浮彫り夕日差

小刻みに震え春水過ぎゆけり

啓蟄の楠の走り根見渡して

手を置きて日永の山の岩の角

波打てる鎌倉石に落椿

手さぐりに春の夜の雨まかりけり

真暗がりそこそこ打ちて春の雨

夜の底の何處打つとなく春の雨

春といふ雪の振り方舞ふ雪に

春の夜の上空に入る寒気団

これまた妻を伴いまだ多少寒さ残る南伊豆

下田石廊崎へ。

途中下曾我の梅を見んと降り立てば何と

ラッキーなことに流鏝馬を催していた。

奥石廊崎で遊船と洒落たのはよいが往きは

よいよい帰りは猛烈な風雨浪の高いこと

高いこと。命拾いの遊船でした。

湯けむりの中の湯口に寒の雨

花ダチュラぶらりと下がる風待港

輝ける花菜明りも南伊豆

最南端アロエ畑の中に村

鮫狩りの話をしつつアロエ剪る

花菜の沖相模遠州灘続き

コーヒーの木の枝手折り嗅ぎゆけり

パイヤの實の成る跡の波模様

シヨールとるチュウインガムの木の邊り

バナナの花続きに小バナナ大バナナ

クロトンは出湯の余熱に木を成せり

奥石廊雨の降り込む枯蔓谷

花筒が伸び来ダチュラの花これから

下田港きだちちようせんあさがお咲く

ハイビスカス花の真中の突起物

ハイビスカスハイビスカスと聲懸けて

ブーゲンビリア花は胡蝶の舞ふごとく

春愁ふウツボカズラに指入れて

着膨れて見るコーヒーの木ののっぽ

花了へしアロエの村の沖時化て

パイヤ生るまこと真青な青果にて

蘭棟のともかく蘭の香にそまる

スターフルーツの木とよその幹すんなりと

老齡のパパイヤの木の錆錆と

パイヤの鈴生りどつくといふ言葉

古草に古草のいろ伊豆の雨

完熟のパパイヤそれを賞味せん

室咲きにして赤巨大アマリリス

さゑざゑと洋妾（らしやめん）お吉の語り

口

枇杷の花そこはかとして癒ゆる傷

ブーゲンビリア花はこれにてそれは苞

遊船に傍若無人の雨と浪

暖雨来て烏山椒ずぶ濡れに

養生の我が身をブーゲンビリア透き

パイヤの室の大玻璃暖雨打ち

ラン棟に舌噛みさうなランの名も

明け鳥さゑざゑ唄ふお吉絵圖

唐人お吉経営の店なり

安直楼に登り余寒の畳踏む

安直楼余寒車軸を流す雨

暖雨の韻き酒樓の有明行燈に

冴返るお吉愛用大徳利

群生の烏山椒打ち暖雨

伊豆春宵魚の如くに目の利きて

春立ちて根府川沖のかさご漁

霜柱曾我兄弟の墓所に佇ち

真鶴の丘又丘の春灯

勅願寺バケツの水の氷りけり

玉泉寺

総領事ハリス好みの仏手柑

総領事ハリス出府圖春の雨

屠殺場跡

屠牛木とその木名付けて仏手柑

音もなく下田の雨や堂障子

船遊び黒潮洗ふとつぱづれ

年代物写真機出して梅を撮る

宿り木にほうと佇む耳袋

中伊豆の山々が負ふ春入日

花待ちて河津桜の祭幡

下曾我の梅皚々の方十里

千蒲団富士の白妙差しにけり

冠雪の富士は野梅の空つづき

宿木の鞠の十あまり大櫓

ボランティアガイド蝶々冬帽子

宿木は一つ櫓に春立てり

見張所の大砲暖雨弾くかな

遊船といふも激浪奥石廊

ウバメガシ黒々濡らし暖雨過ぐ

熱川の宿てふ宿の春灯

雨に散る梅花俗名きちの墓

石路の絮曾我兄弟の墓にかな

下曾我の曾我さん宅の白き梅

黒潮の潮目立たせて鱒東風

石廊崎沖冬ターナーの浪の白

今年は富士の裾野の下曾我と我が郷土武州
金沢区政50周年記念として
金沢の浜辺で催された流鏝馬（やぶさめ）
を図らずも二つ見た。

かつて俳優三船俊郎が鎌倉八幡宮でヒイフ
ッ鏝矢を射込んで以来の流鏝馬
である。その三船さんも今年黄泉路へ旅立
たれて。。。。。

流鏝馬の貌のみるみる春日中
流鏝馬の鼻づら切りて春疾風
流鏝馬の伸び縮みして春の土手
下曾我

流鏝馬の馬首めぐらせて冠雪富士
永日の馬体に鞭を一の射手

湖ほとり柳は芽持つ白描画
湖離る鴨のこころも昼霞
みづうみの面伝ひて春蠢く

西湖微風やうやう柳の芽に及ぶ
浅春のおもひは淡にして湖辺

横浜線のとつぱづれ橋本より20分ほどバ
スで入った山地に

「かたくりの里」というのがあると
聞いて夫婦してこれまた出かけた。
おかげで「片栗の花」とじっくりつき合え
た。

熊本を皮切り開花予報出て
沿線のけふも目にして朝桜
白木蓮不良のやうに薄汚れ

大樗いつものやうに芽吹きそむ

街中の辛夷今年もあたらしく
横浜線山辺で降りて堅香子見に

かたかごの花の盗み目林中に
べべんべんべんとかたかご花の反る

沿線のきのふ気付きし桜過ぐ
山茱萸が咲きぬ陽気もよくなりぬ

かたかごのばらりと云ふは五六輪
つんのめり咲きのかたくり風受けて

養生の先見え玄海つつじかな

日向水木の花に入らむと虻もがき
時が来てこれが木五倍子と気付く頃

山茱萸の花の黄沈む鄙曇り

日差す中日向水木の鈴振れり

かたかごの花のうようよ屋敷墓

控え目になほ控え目に花かたかご

屯してかたかご崖を覗き込む

花の名の岩うちわとはこけおどし

かたかごの素描くりくり瞳（め）の動く

かたくりの花はまだ咲く鄙曇り

日の目見ぬことをつらつらネコの目草

昨年の一昨年の諸葛菜

大斜面にしてかたかごの一等地

実用に徹す木（ボク）なり黒文字咲く

戻るのは今が潮時花かたかご

かたかごへ視線を落とす老夫婦

かたくりの花花の丘のぼる

かたくりの反花飛驒のからくりめく

かたくりの葉のいますこし花を撮る

彩りは一步譲りて黒文字咲く

端つこの花かたくりの風誘ふ

面長の堅香子に顔突き出して

黒文字の苗木を呉れて逝きし人

かたくりの一つの花へ視線かな

かたくりの花のむつとり右衛門かな

かたくりの花に抱えぬ内緒ごと

アイドルの髪型かたかご型どりて

かたくりの丘歩き来し疲れ見ゆ

かたくりを食する段になる話

かたくりの花の貧乏揺すりして
彼の人の目線点々かたかごへ
禿頭を気にせぬ世なり更紗木瓜
花咲けと少し川風温かく
薄着して巡る堅香子日和かな
かたかごのつんのめり咲きして墓地裏

手術前とて思い立って下諏訪御柱祭へと出かけたが

浮塵子の如く人集まり来たりて木落とし坂周辺にに何と二十と五萬人。

これはいかんと当局入場制限をするも次から次と到着する遠来の客に

駅前は大混乱。入れぬと言っても粘る客。きれいさっぱりとあきらめて

よそへ廻る客。ひきこもごもの声の中我等は花の高遠へ。車中聞けば

駒ヶ根の早太郎温泉なるところあり清冽な水奔る処也と褒めれば今日の

宿はここぞと決めぬ。

高遠城をさくらさくらと唄ひ巡れば日も傾きて。駒ヶ根の早太郎温泉へと

駆けつけぬ。

翌朝気を取り直して御柱祭り見物に再挑戦。下諏訪へ進め進めの鈍行車。

駅よりはシャトルバスにて木落とし坂へまっしぐら。

坂下に詰め込まれたり人の数。

戻り路の甲州路はうつらうつらの桃の花。くしゃくしゃになって我が家に辿り着いた。

下諏訪御柱祭

木落としを見んと歩いて歩いて

めいっばい飛び込んでくる櫟の芽

赤芽噴く一木櫟に立ち交り

接骨木の花ごつごつと咲き出しぬ

御柱木に芽張るなか曳行す

元綱のふてぶてしきを汗し曳く

綱打ちて氏子の曳ける御柱

坂上の幅員狭し御柱曳く

櫟そろそろ芽吹き御柱曳行路

綱曳けば油の滑り御柱

控へをる秋宮一之御柱

梶取り衆追掛綱に玉の汗

えいえいと山出し梶子衆汗飛ばす

木落としの氏子曳き縄襻掛け

木落とし衆落下地点へ詰寄り

木落としのずるずる深山巨木椏

木落としの椏の巨木の尾にも綱

木落とし衆海道町の幡の下

御柱落とす地点へ白き蝶

芽吹く山前に天下の木落とし坂

木落とし坂下にこぞるや蟻のごと

木落とし坂正面の山芽吹きけり

木落としの始終見る顔日焼けして

御柱落とす祭の沸きに沸く

莫菴持ちて木落とし坂の正面に

落とさんと諏訪の春宮二之柱

御柱ぬつと顔出す芽木の空

御柱芽吹き空に乗り出して

坂上の空へせり出す御柱

わずずいと落としにかかる御柱

山風に木遣り起こりて木落とし坂

木落としの始め木遣りを高空に

もくもくと芽吹く櫟に木落とし衆

木落としの木遣り芽吹ける櫟らに

秋宮のいざ木落としの木遣りかな

元綱に小綱を掛けて木落とし衆

木落としの氏子ら元綱引きつけて

縫り付く人人の木落とし坂

木落としはまばたき一つする間に

延々と待ちし木落とし始まれり

裂帛の気合に曳ける御柱

御柱引き落とさるる木の芽空

木落としや芽吹き旺んな山の中

若衆のどうと馬乗り御柱

木落としの木（ボク）の突っ込む春の土

馬乗りの若衆飛ばしぬ御柱
転げ落つ諏訪の男と御柱
土煙りあげて突つ込む御柱
地下足袋の木落とし衆の汚れ膝
地下足袋の木落とし衆の汗つかき
黝々と木落とし坂に松の影
安置され木の芽の下の御柱
注連掛の空を芽吹き風抜けり
芽吹くなか造りは諏訪の宮大工

高遠花祭り・駒ヶ根

田蛙の此処は井月の伊那路かな
蛙啼く伊那に井月の居ったつけ
飯田線揺り起こされて嶺櫻
陽気よく伊那路の花に出逢はんと
伊那路まで花追ひかける旅をして
田畑の幾何学模様榛芽吹く
花季の月の井月の伊那路かな
駅毎の伊那路のさくら愛でゆくも
春の田に鴉群るるは何かある
苗木畑忘れたやうに白き雲
りんごの木の手旗信号めく芽吹き
花綻びんと赤らむ枝々も
残雪に赤松は幹赭く赭く
残雪光花に生彩与へけり
高遠の浮かび上れり花霞
花に浮かれ来たる奴に高遠城
旅をして花の江戸城高遠城
驚嘆に値す高遠城の花
疵を持つコヒガンザクラでありにけり
花を撮る人や我等は花を観る
翳を持ち初めしコヒガンザクラかな
科（しな）ありて高遠城の花のいろ
城山の高き処に花薔
空濠の木橋を渡り花の風
空濠にコヒガンザクラの花の枝

昔日の高遠城の花の色
もうけもの満開高遠櫻かな
コヒガンザクラゆふべ紫濃く淡く
空濠の蛙の啼ける夕櫻
夕ざればコヒガンザクラ濃紫
城門を出て振り返る夕櫻
進徳館花を潜りて藩士めく
藩校の教場抜けて花の風
藩校の階（きざはし）花屑積らせて
藩校に通ふ思ひに花潜り
中村不折像
パレット持つ不折胸像落花浴ぶ
永日の高遠城下町割圖
絵島囲屋敷
永日の一机据えあり絵島の間
庭木芽吹く頃となりをり下女詰所
行水所コヒガンザクラ明りして
すがれの巢日永のホテルフロントに
残雪や朝の川音切れ込む空
残雪の宝剣岳（ほうけん）の尖り具合かな
宝剣岳（ほうけん）の剣もどきの残雪光
青毛虫程の山麓木五倍子かな
垂れ木五倍子山麓の冷え募りけり
あをあをと毛虫の如く芽吹く木も
堰を落つ水の光に木の芽噴く
光前寺
糸櫻あかあか霊犬祀る杜

甲府盆地

花桃の照りに浮き足立つここに
桃の花日差し通りて透明に
日の差してやや透明に桃の花
一昔いや二昔なる諸葛菜

花 歩き

四つも句集を作れば作る句作る句昔の

作品とはち合わせ。句材乏しきをしき
りと嘆く昨今ではあるが、とは云へ
何か詠まねばと目線を上げれば花花花。
さうだ毎年花を詠み込めばと一決する
ものの、どうしてどうして出来上がる
作品の是またトンチンカン。

さればとて今年目指した花所は、花の東京
は千鳥ヶ淵と新宿御苑。膝元の金澤文庫。

横須賀安浦旧鎮守府長官官舎 そして
最後に高遠遠櫻と出向いた。

横須賀安浦旧鎮守府長官官舎

風格ある櫻なりきと顎引けり
鉄棒をぐいと握りぬ朝櫻

水の上奔るものゐて春日中
まみえたる鎮守府長官官舎の花

丘の上の花の長官官舎かな
花下にゐて小鳥のごとく黙し居ぬ

鎮守府の海へ櫻の花張れる
鎮守府の官舎の樟の春落葉

鎮守府の海空花の上に展け
大薨に適ふ櫻の幹と枝

櫻いっぼん敷地に簡易裁判所
戦経し櫻の幹へ独り言

要人の花見せんとて旧鎮守府
海側へ長官官舎の花吹雪

長官の宿舎走り根にも櫻花
古木にて長官官舎の櫻どち

日本の花に逢はんと豪華船
瘤ありて長官官舎の花の幹

遠来の客もてなせるごと櫻

御忌

雨ながら御忌の人出で増上寺
御忌の雨櫻の上にさんさんと
けふ御忌の総門脇の苗木売
御忌の雨花屑踏みて檀家衆

通院 カテール検査入院

花冷えの電極六つ心電図
花過ぎて僧巾弁の再検査

永日の欠伸百度して待たされ
春服につつまれ心臓外科患者
造影剤かつと患部を焼く暮春
永日の混んでは困る診察順

x線撮るが仕事の万愚節
採血の恐ろしければ咳払ひ
花季の外来患者となり通ふ
手術痕どうだといはんばかりの花季

待たされていらいら虫の風邪患者
花過ぎの葉貰ひて落ちつきぬ
永日の待ちくたびれしレントゲン
検診を了へ来て花に寛げり

胆嚢の検査ゼリーの花冷え
花どきの花びらいろの待合椅子
採血の管を探せり目借時
レントゲン撮る大仕事花は今

花どきを外来患者として通院

皇居の櫻

よく啼いて千鳥ヶ淵の花の鳥
山吹にどぶんと鯉の立てる音
花冷えの鯉の口髭しろしろと
褒貶の褒の明るさ櫻咲く

雨の鴨花冷えの水脈曳きにけり
振りあほぐ鴨に皇居の櫻かな

夕づける花懐に鳥の数

歴然と雨後の櫻の黝き幹

あめんぼの準備体操始まれり

大人の風格もてる朝櫻

花散ってさみしくなりぬ濠の水

一雨に花崩れたり北の丸

堀割へまっさかさまに花の房

花散らす風颯々と生まれけり

若櫂の股に落花の二三片

鴨飛来花散るからに散るからに

掘割へ落花すつ飛ぶ九段下

水面の亀の浮き出て花見季

諧もある櫻となりて田安門

怪童の腕（かいな）のやうなさくらの枝

濠の名の連なる花の北の丸

雨暗の半蔵門の大櫻

城垣の大石あらはなる落花

花屑にすっぽり走り根埋もれけり

城垣に当りて落花田安門

仏生会

仏生会背に負ふ山に芽吹くもの

掛けられて甘茶光りの甘茶佛

里の子の爪先立ちて甘茶佛

近在の金盞花葺き花御堂

田舎には田舎の花の花御堂

花の風額に受けつ滑り台

川の面を虫駆け巡る仏生会

花御堂四辺に稚児の寄り着きぬ

鉄棒の高さ選ぶ子夕櫻

白象の讃ふる白を花房も

御苑の櫻

新樹冷え吾と忠犬ハチ公に

二三言交はしたちまち花下の友

森の櫻スポットライト浴ぶごとし

飛び降りて花下の鴉の濡羽いろ

花屑を散り敷く丘に丸み生れ

片付ける将（はた）敷き延べる花莖

いちめんの櫻の花の面かな

ひとかどの櫻とおもふ胴廻り

風吹けば花屑奔りたくなりぬ

小一時間散れば花尽く櫻とも

花を吹く風の変幻自在なり

黝々と雨後の櫻の幹よじる

花吹雪携帯電話せる鼻先

張る花のタツチ櫻に負けぬやう

画用紙にすいと落花の当たる音

再び日受けてさくらの晴れがまし

一陣の風来風格ある櫻

手を振りて人歩くなり花の中

散り積もり今は地表の花明り

只管になること落花には如かず

花を描く名人口を利き呉れぬ

照明が当るやうなり遠櫻

花屑を吹き割り風の通るみち

うすずみに鯉の群れるる雨催

名人は花をどう描く覗きけり

花屑は風に漣なす根方

襦褌（うちかけ）の白妙櫻ふぶきけり

花屑に斑あり次の風吹くも

花屑の恍惚界に入りゆけり

花屑を踏みて雲表ゆくごとし

鯉に降る飛花の極めて日本的

花屑の道を御苑に引き込みて

散る気配なんぞさらさら無きさくら

日は斜交ひさくら嫩葉に朱の差して

おとおと飛花おとおと飛花御苑なる

御苑の櫻

金澤文庫

旭今花の枝先捉へけり
あおあおと傘をおっ立て破れ傘
天南星うつすら光放ちけり
生誕会櫻芽吹きの子迎え
鳥は唄ふごとくに啼けり朝櫻
見届けるごとくに了る花を見て
称名寺塔頭光明院
花の寺武蔵風土記にある一臈(ろう)
鳥山椒さらさら芽吹く気など無く
ぬるみ初む水に蚯蚓の伸び縮み
芽吹き初む谷戸のとんがり三ツ葉かな
全身に今日を受けとる山櫻
一鳥のツイツツツツイ朝櫻
鳥のごと花の懐深く入る
花見とて山の日焼けをおそれけり
山門の櫻に一声挙げにけり
谷(やつ)育ちどれも櫻の丈得たり
朝櫻唄ふごとくに鳥啼けり
枝先の動ける其処に花の鳥
山生ひの櫻の謚に浸りをり
画用紙と鉛筆持つ子花の前
薄ら日はなづなの花の先つぽに
花蕙お隣さんの勝手口
花明り受けて楷樹の芽吹きかな
花の了りはぐらかされて仕舞ひけり
巾広に朱の反橋朝櫻
夜桜の萬の花房宙吊りに
枝々に光頰てり山櫻
花どきの花はさて置き幹秀づ
夜桜の冷えにまとわれつかれけり
谷戸の日を頷ち合ひをりすみれ草
初ざくらの花房とつても晴れがまし
石仁王パツと咲かせし朝櫻
欄干に露降り立てる朝桜
爛漫の花を指さすおんぶの子
きりきりと帯締めあげぬ朝櫻

花の房旭の彩を加へけり
芽吹かんと若き櫻に遅れとる
人混みに入りゆき花の人となる
しんしんと冷ゆ夜桜に首すくめ
その白さためつすがめつ朝櫻
ぼんぼりに匂ひのありし夜の櫻
雪洞の人肌いろに夜の櫻
朝櫻水面割きて鯉の音
トトトトとトトと一鳥花の山
谷戸咲きの木五倍子に人語昇り来る
春日差木肌の粗き櫟かな
初ざくらこゑあり今が一番と
見頃なる花とは別に芽吹く木々
夫婦して見にゆくさくらありにけり
朝の気を孕みて花の充つ櫻
花どきの谷戸に光をぶち込めり
夜桜に誘つてみてはと付け足せり
戻りてさくらに彩の戻るとき
花よりもさくらの幹の堂々と
山櫻さう山櫻葉の臙脂
朝櫻小鳥の讚え合ふごとく
棘を持つ無粋も鳥山椒の芽
夜桜にしこたま冷えて戻りけり
接骨木の芽吹きそのほか諸々も
草は草櫻は櫻光り帯ぶ
花の枝の鳥の仕草の始終かな
頭の赤きマツチに似たり櫻しべ

亀戸天神の藤を見、船橋屋で葛餅を食ふて
躑躅の根津権現へ。東都バスの梯子などし

て
一日雨の下町に遊んだ。

最後は旧古河庭園へ。そこで日が暮れた。

亀戸天神

鶯縁起読み継ぐ藤の雨の中

天神の藤にかうもり傘畳む

藤を見て戻りがてらの船橋屋

黒蜜をとろり雨暗葛餅に

惜春の雪隠を借る船橋屋

雨暗の葛餅の端を掬ひけり

青梅の転がる亀戸天神に

青梅の落ち初む亀戸天神社

頭の中に藤の暗がり垂れ込めぬ

雨暗の光り頌てり下がり藤

雪崩れ込む音を添へたき下り藤

越天樂奏づるごとく下り藤

藤棚の藤の明暗潜りけり

棚端の藤の明るく雨上り

近藤は佃、遠藤は亀戸なり

藤見んと千客万来天神社

天神の紫深め藤の雨

藤咲くや二十八棚いちどきに

藤浪の二十八棚雨注ぐ

水上に一丁風欲しき下がり藤

藤見頃なる亀戸の雨の隙

藤棚の藤の間より窺へり

藤浪に賛嘆のこゑ重なれり

藤棚の暗部雫を零しけり

天神の藤衰えを知らぬなり

学問の神の社の藤秀で

藤棚ゆく雨の足許不如意かな

藤浪の亀戸天神後にせり

広重の藤咲く風につばくらめ

天神の藤を一望太鼓橋

亀戸の東都随一五尺藤

肩先に藤の色差す棚下を

亀戸の煎り豆本舗藤の雨

根津神社

大鳥居朱ケのつつじをはめ込みに

根津神社略記後ろの大つつじ

人だかり権現さまの朱ケつつじ

まばゆくて櫛若葉の根津権現

本郷の学生寮の枇杷咲けり

雨天雨後つつじ明りの根津権現

緋のつつじ徳川家宣胞衣（えな）塚に

旧古河庭園

薔薇に雨残り洋館ココア色

薔薇の名は奇しくも青空古河邸

王冠のごとき庭園つつじかな

黄の似合ふ薔薇の名札はオクラホマ

真紅ならむ薔薇はその名もラスベガス

苞を解く棕櫚は亀の手さながらに

園丁と話しぬつつじ明り越し

金澤八景 野島海岸

浅蜷採る仕度万全海に着く

蟹蟹と岩を起こして蟹捕る子

砂さくとビーチサンダル履き始め

干潟踏みすつくと健康さうな脚

きいきいごゑ蟹の赤ちゃん捕まえて

汐干狩昔も今も腰屈め

潮上げ来浅蜷どっさりとれし浜

馬刀突の砂引っ搔いて穴探し

追いつめられ蟹突堤に脚を掛け
蟹を捕る兄とバケツを持つ妹
舟蟲に負けず劣らず浅蛸堀
薄闇に浅蛸の砂を吐かせぬ
乾ききる干潟とことこ蟹の這ふ
心地よき素足干潟を蟹の這ふ
隠れぬし岩を持ち上げられ磯蟹
砂被り磯蟹白を切るつもり
ほおり投げ潮吹潮吹にぞ当る
舟虫の俗気俗気を呼ぶごとし

校庭の藤

藤棚の下より外野にこゑ飛びぬ
藤棚の青空覗く一所
小振りなる藤棚の藤声援す
棚の藤職員室に片寄れり
校庭の砂場に散れり棚の藤
藤棚越し少年野球観戦す
校庭の藤棚の藤吹かれをり

その他

脂肪分取りすぎの身に棕櫚咲けり
再検査通知を貰ふ花曇り
浅草寺裏の緋躑躅旺んなり
ユスリ蚊の椎の匂ひにだまなせり
一旦は雨の牡丹見取り止めぬ
やぶからし最初考え違ひして
やぶからし天地人なる天に向き
葉ざくらの雨の墨堤端かすみ
屯して昔話を銭葵
大手鞠小手鞠我家（うち）のは中手鞠
浦島草蕭白好みの画材にて
緋牡丹に風の如くに近づくも
緋牡丹を風の如くに立ち去るも
花びらの翳も真っ赤に紅牡丹
真紅芯より射せる紅牡丹
ぼうたんの匂ひ薄める風立ちて

緋牡丹の錯乱状態つづくなり
緋牡丹の緋色くらくら術後の目
さうなつてゐるかどうかは田鼠次第
蔓草の蔓八方に夏きざす
行末は亭々たるべく棕櫚の花
トラ鱧の薄茶の縞の涼しさう
桃霞盆地の端よりせり出して
夏近し養生一と年大過なく
朝寝して麒麟となれる一齣も
竹秋の竹友情の黄金色
亀鳴かす程でなくともこの俳味
火がとほつて来たと湯豆腐動きけり
田蛙の異議申し立てせるごとし
砂まみれ水母渚に張り付けり
五月妻躰廻して浄め塩

檮若葉

朝の鳥檮若葉に息づくに
夏檮幹しなやかに象の脚
夏檮小枝撓めて風吹けり
新品の柏若葉に目を見張り
夏檮傾きながら戦ぎけり
青葉吹き絞り好漢夏けやき
梅雨空を諾ふ楯の無頼漢

海浜風景

いちめんの赤つめくさに浜の風
車輪梅海匂ふとき匂はぬとき
夏みかんの花の匂ひを風薄め
ふつつつと汗の香沸ける松林
からすのゑんどう蔓花莢と順に見て
接吻といふ語思へりかたばみに
まてば椎若葉金粉振り撒けり
刈り込まるデイゴ沸々芽吹くかな

大船植物園

植物園葉の照り強き珊瑚樹垣
珊瑚樹の虫喰ひ若葉日にびかり
室咲きの舌嚙みさうな花の名よ
常夏のウツボカズラのサキノホン
太茎の東西南北薔薇の刺
屯して睡蓮の葉のごちゃごちゃと
亀型に睡蓮群れて咲き出しぬ
聡明にルーズベルトといふ芍薬
葉も薄ら光り幽香てふ芍薬
衆望てふ芍薬の明諾へり
絶妙といふ芍薬の花間近
大船系（大船植物園改良品種）
芍薬の茎のひよろひよろせる系も
芍薬の風下にさしかかりけり
芍薬の巧の色といふが咲き
冥界の明るさもつて芍薬咲く
曇天の下芍薬の葉の暗み
そよ風と共に薔薇園巡りけり
薔薇の赤き棘も美観の一つにて
ヂキタリスどの筒花に虻潜る
花房を伝ひて微光下がり藤
芍薬の蕾こつんと空叩く
芍薬の蕾期待を集めけり
睡蓮の丸葉次々波打つて
花咲けばさぞやと思ふ芍薬玉

かきつばた風曇天をえぐりけり
かきつばた一花一花の白飛燕

陽谷山龍寶寺

観音は空に存すや桐の花
はつなつの砂場のままごと遊びかな
飴色の病葉落ちて骨の音
ヒメジオン頼りなく風兆しけり
芍薬の蕾ひゅうひゅう揚がりけり
落ち始む青梅一つ拾ひ上ぐ
曇天に桐のむらさき紛れけり
桐の花比率大事に景描け
桐の花入れて一景仕上げけり
桐描くには水彩にしくはなし
桐の花一人離れて描く人も
花桐の描き方先生批評せり
桐の花やうやく空がおちつきぬ
桐の花程よき距離に立ちてみる
芍薬の蕾むんずと曇る空
桐の木のある寺今も桐咲けり
境内に桐は三本程あるか
曇天より少し明るく桐の花
雨雲の彩を帯びたる桐の花
花桐を縦に切り取る一構図
すいれんの色は紫先ず以て
睡蓮のミセス×ミセス×
薔薇園の黄色眩しき薔薇に寄る
棘赤き薔薇に怪しき空模様
空模様何とかもちさう桐の花
桐の花通り雨たること希ふ
竹皮を脱ぐ傍の黄泉路ゆく
竹皮を脱ぐ竹林は音を生み
竹秋の竹林鳴動して止まず

金澤文庫

うすずみに大き鯉の背夏隣
蔓垂れて幽霊もどき藪からし

草の蔓木の蔓泳ぐ五月空
さくららんぼ撥音便のん韻（ひび）く
黄菖蒲に暮れなむとする水の色
十葉の百も承知の匂ひこれ
反橋より金澤山（きんたくさん）の山若葉
惜春の鼻を浮かべて池の亀
新緑のもこもこ山の五月空
やぶからし薄光りせる蔓を宙へ
浄土式庭園に生ふやぶからし
惜春の朱の二本入る亀の首
鳥の子育つ樹頭を風掠め
青嵐鴉のこゑを奪ひけり
やぶからし掴まり立ちのやぶからし

その他

小学校裏門椎の花匂ふ
この家の庭隅紫蘭よく似合ふ
だんご虫殖ゆる景気の悪しき世に
だんご虫庭這ひ廻る五月来ぬ
物騒な子育てどきの杜鳥
この葉叢銭葵ちは知って居り
泰山木落葉木片降る如く
泰山木葉裏葉表色違え
追隨を許さぬかいもちかきの速さ
山女魚らの口肥えて来ぬ青葉どき
花了り椽うっさうとして来たり
天井大風櫺若葉を吹き絞る
両頬に五月一日その日の風
一人に花が了つて仕舞ひけり
汗粒のごとき万蕾女貞
女貞咲かせこの家地味も地味
プールの面葉ざくら季の波立てり
鉄鳴り薔薇手入れせる家の昼
椎の香のこれぞてふ香に立ち止る
椎の香の一徹通し抜きにけり
馬刀貝の素っ頓狂をわし掴み

● HAIKU199805sono3

金沢区制五十周年記念薪能に因み植樹
枯れたれば青葉の楓植ゑにけり

蛙の目池の水嵩目減りして

懐の枝より暮れけり夏櫛

木下闇草木おのれの時を得て

青葉山震ひ六浦(むつら)の能鼓

ヤットナ葉移りをせる蝸牛

演目は老を忘るる蝸牛

藪の中人程もある蝸牛

雌し物に乗りて蝸牛をなぶりづめ

やるまいぞやるまいぞとて蝸牛

青葉冷面テ伝ひに橋懸り

下闇の六浦の里に差しかかり

一陣の夜風に青葉波打ちて

楓の精五月闇より現るる

能六浦鼓打ち込む五月闇

詠はなむ青葉楓の面目を

青葉楓詠はむ面目なやの歌

シテの舞裾をひらりと楓いろ

かがり火に煽られのぼる蛾の白き

篝火爆ぜ青葉濃闇の芯打てり

能舞台篝火虫を霧しけり

蛾も乱舞謡六浦もおほづめに

謡六浦終演間近臺のこゑ

称名寺いく夜な夜なの青葉木菟

● HAIKU199806sonoi

横浜線 小机城のあたりをぶらりと散策。
最近建ったばかりのサッカー場がのっぴら
に

ドデンとおっ建っていた。

小机城はドカドカと筍が生い茂って筍城と
いったところ。

その藪蚊は何ともしつこかった。

青梅の葉叢打ち雨韻きけり

只落つを待つのみ枇杷の熟れにけり

黒雲もでで虫も角突き出して

白南風に雨滴飛ばしぬ泰山木

女貞雨に苔の弾けけり

家内に籠り勝ちなる黄楊の花

はびこるといふ気の見えず諸の苗

ひまはりを十本植うは晴れがまし

万遍なく葉ざくら吹かれ通学路

葉ざくらの下にて開く句控帖

女貞雨しよぼしよぼと至りけり

口つぐむ百合に魂胆あるごとし

泰山木落葉ばらばら雨至り

南の方より晴れて浜昼顔

浅黄色蚩袋は未だ袋

蕾む百合あうむ返しをせる如し

もろこしの伸びて聳ゆるさま想ふ

そこここに百合の苔の見え隠れ

今年竹雨は烟りて奔るなり

ニス塗りし如くに百合の苔かな

清浄とさらしなしようま吹かるる日

葉の裏をひよいと覗きてさくらの実

折り合いのいつしかつきし茄子の花

赤紫蘇の色の秘密を秘す如し

群がれる紫蘇に光沢生まれけり

きつぱりとあぢさゐに彩載りにけり

むらがりて紫蘇は月下に林立す

十葉の葉の清浄と雲松院

家内の暗みくる頃女貞

鎌倉石げっそり瘦せて梅雨近む

泰山木瞳く花に雨激し

十葉の手にする迄もなき匂ひ

南風来る席を譲りぬ見晴し台

母の日の妻に鉢物カーネーション

雑草のなかの雑草車前草咲く

しづけさに蔓立ち上がる岩殿寺

あぢさゐの中途半端な浅黄色

柿若葉はつと蔵壁ありにけり

ずんぐりとやがてすらりと今年竹

夏みかんの花のぶんぶんるつぽかな

小机城筍城となりにけり

鴨居山雀発たせて夕若葉

竹皮を脱ぐ山道の近かりき

竹皮の黒より黒き黒揚羽

筍の雑兵空濠登りけり

二の丸の藪蚊しつこく追ひ来たり

漆黒の竹皮を脱ぐ無音界

筍は口を噤んで掘るべかり

筍の愚鈍なる頭を傾けり

竹落葉埃つぽきを踏み来たり

山百合の喉の辺りに手をやりて

みるからに椰の一徹さみだるる

泰山木落葉いちまい先ず拾ふ

青梅雨の熟眠より覚め蘇生坊

川崎のあじさい寺 妙楽寺から
東高根森林公園へ。

みだらなり雨に累々こぼれ枇杷
あぢさゐの浅黄続きの妙楽寺
朝風は平らに吹いて額の花
あぢさゐの浅黄空より貰ひし色
十葉の潔く咲く雨の中
一坂を登り切るまで濃あじさゐ
河骨の葉上に出でて咲くもあり
枇杷の木にだらだら雨の始まり
あぢさゐの屯す中に小径あり
ねずみもち花屑零す坂古りぬ
聞き来し道わからなくなり立葵
イヌシデの花序に緑雨の降り続く
子をなせるガアガア鴉気が立つて
梅雨晴間植木抱へて乗車せり
独特のあゝこの匂ひねずみもち
くわくわと啼き損ねしは鴉の子
睡蓮の花に葉に雨降り抜きし
旧街道角つこの銭葵
その中に色載り遅るあぢさゐも
手入れよき牡丹の寺に緑雨降る
イヌシデの花序緑陰に頭ちにけり
寺領の紫蘇はびこったのか殖やせしか
あぢさゐの雨の葉っぱのほひかな
あぢさゐの葉をぱちぱちと雨至る
あぢさゐの紫好みにて保守派
あぢさゐの葉末葉末の雨雫
キャベツ巻く葉壁に沿ひ蝶昇り
久々の晴れ間向日葵ずんと伸び
あめんぼのスクランブルを組み遡行
一つ咲きこんなに低く泰山木
六月の鴉どすんと樹頭に降り
蛭袋今朝方ありし雨まみれ
白あぢさゐ明りの道を進みけり

草むらの草透き蛭袋の白

柵の中蛭袋の変電所

今朝方の雨を宿せる釣鐘草

水馬群る川のちまちま流れれば

あぢさゐに降りて募れる色風情

これからのあぢさゐの色半ばかな

立葵蝶道草をくつてをり

あぢさゐに雨の降り込む扇き谷

蓮池の底まさぐりて濁す奴

河骨の葉陰翳強めけり

葉っぱの上そら豆いろの雨蛙

かがんぼの雨やり過ぐす葉末かな

七月の蜘蛛の巣張れり水の上

索性よき樹木といはむ花水木

あぢさゐの道を狭めて張り出せり

こんどは会社の検診で腎臓がおかしいの
お見立て。

心臓手術と同じ病院で造影剤入れて見て貰
ったところ

二つある腎臓のひとつがサボって居った。

病名は水腎症。

機能が低下して水浸けの腎臓である。

さて小奴を奪るものやら奪らぬものやら一
ア思案といったところ。

伽羅藪を箸もて持ち上げ「例のホラ」

見舞はんと路地裏抜けて枇杷の頃

巢鴉の眼下を通り抜けにけり

トラ鱧の縞の薄茶に涼しめり

だんご虫殖ゆる景気の悪き世に

明けてゐる肩の辺りの五月冷え

青森産海鞘を食うべて酔余の眼

緑陰の風高々と梢とほる

機知閃く如くに青葉ひらめけり

人も又鳩の目をして緑陰に

大緑陰人鳩とかげ憩はしめ

緑陰に枝枝深く又浅く

緑陰に奔放に枝拡ぐ櫛

梅雨の検診今度は何處と身構えぬ

さみだるる尿道造影剤検査

さみだるる頃に判明水腎症

水浸きては梅雨の腎臓一つ駄目

疑ひの白黒つきぬ梅雨の腎臓

尿採るならそれならさうと梅雨患者

はつなつの尿を所望す泌尿器科

泌尿器科外来患者更衣

泌尿器科患者見渡し白扇子

病棟をふらつく夏ものパジャマかな

床ずれのはつかに残る更衣

養生してひととせ経つか枇杷色づく

なうなうと止まるこの蠅不埒なり

硝子器に箸の当りて夏の音

あぢさゐが咲いて清潔無比の園

あめふらし遊びあかして磯日暮れ

お台場の南風受け松毬状住宅

青水無月水上バスが行き来して

花火果て吾らぼかんと中高年

伊豆へ避暑今は山中今は浜

夏落葉回転扉にはねられて

蹴返せばはらほろひれと馬陸かな

● HAIKU199806sono4

梅雨前の近郊散策は小田急沿線の禅寺
浄徳院菖蒲苑と新松田の水田に映える農道
紫陽花。帰路はデパートで開催中の魯山人
展
との目論見であったがヘタバッて魯山人展
は
次回回し。

散り石榴振袖火事の火の粉めく
巢作りの鴉の云へるおらが杜
どんみりと大山入れて植田水
白菖蒲蕾きりきり鎌めく
鮎を釣る尊徳堤の松を背に
尊徳生家探す梅雨入の脚が棒
あぢさゐのさみどり映ゆる植田べり
名水のここだく湧ける辺に菖蒲
丹沢の今金色に植田水
水蜘蛛の弾けば弾き返す奴
蛙鳴き尊徳生家裏辺り
植田のみどり畦のあぢさゐさみどりに
青梅雨の家包曾我の極上梅
尊徳生地
泥運ぶ燕律儀に栢山村
田が植り尊徳捨て苗栽培地
緑立つ堤尊徳生誕地
尊徳堤松より梅雨に入りにけり
植え方に問題のある田なりけり
植え方のあそこおかしき植田かな
ぎぼうしに丹沢の空明るめり
足柄の山麓の雨紫陽花に
木杭のごとく釣人梅雨入川
田蛙鳴く彼方尊徳生家あり
小田原産干物売店梅雨裸燈
丹沢へ螢袋の道いっぽん
足跡のここで反転植田中
あぢさゐにはやりすたりの色ありし

痛快に雨降嶺よぎる乙鳥
あぢさゐの株の間より顔を出し
泰山木向き合ひ咲ける花あゝん
山峡の風に黄ばみて余り苗
すかし百合ちらほら見ゆる御殿場線
酒匂川川風燕を翻す
乙鳥の前後尊徳回村像
中流農民尊徳生家梅雨暗み
植え始む辺りにまとも余り苗

緑陰の近郊の森歩くべく
なに見るとなく物を見て首夏一句
学びとる處おあり葱坊主
この頃はそんじょそこらに時計草
みるからに元気のかたまり水馬
梅雨寒のだから雨の降りつづく
朝は朝の智が働いて朴の花
青梅のいよいよ青く降りしきる
時計草垣に目覚めし目を覗く
花拾ひつつあらためて桐を見る
頑健の妻終に病む梅雨膝小僧
魯山人展観梅雨の日曜日
心臓にも運動療法青き踏む
雨ながら今朝こそ咲くと夏つばき
ざりがにのそっくり返るはこけおどし
西洋紫陽花などと云ひて赤み帯ぶあぢさゐ
流行れば
まがひもの西洋あぢさゐ世に満つる

*

神奈川県花は山百合也。

三浦半島の最先端の駅「三浦口」近辺に

妙音寺なる真言の一寺あり。

この寺に今山百合旺んなりときけば……………

*

山百合の斑のむんむんと蒸し暑き

変わり者山百合の独り咲き

吾も亦物申さんと百合の花

捕虫網持ちて大根台地に佇つ

はまゆふの真白く咲ける崎の雨

山道のここいら百合の匂ひ壺

妙音を発し竹皮脱ぎにけり

砂地畑メロンの花に薄日差す

柁垣毛虫退治を思ひ起つ

音もなく降る雨の中沙羅咲けり

結実の青磁びかりの南瓜なり

山百合の五六花茎のぐらつけり

身に余る花付け百合のぐらつけり

巨き蕾の百合は哲学持つ如し

ほほづきの花も実も皆うつむけり

山百合の山ふうふうと下りて来ぬ

山百合や雨におもてを打たれけり

一湾に雨を呼び込む浜おもと

持ち山の百合満開に一農家

お遍路の立ち止まるごと百合を見る

地図拡張夏帽集ふ車中かな

はすかひに透明な雨山百合に

山百合や胸に風入れ一休止

山百合の般若心経唱ふさま

古典的あぢさゐの彩佳しとせる

山百合の香を掻き立てて雨至り

山百合に一時日照雨上りけり

匂ひ立ち萬の毛穴を開く百合

この蔓は南瓜メロンの兄貴分

山百合や腕うっすら日焼して

浜屋顔面を小さき蜘蛛歩く

メロン蔓西瓜の蔓に崎の風

山百合に息整へり男坂

咲ききつて縣花山百合傾けり

持山の山百合年々減るといふ

山百合の毒婦の如く香をふふみ

山百合がすすき叢より覗きをり

南瓜成り釉葉かけしやうな実も

百合の香を扇ぎて払ひのけにけり

つぼむ百合謡曲なんぞ嗜まむ

山百合の香の中に顔突つ込みぬ

毒婦の香然と山百合立ち匂ふ

段丘に縣花山百合咲き出せり

称名を唱ふるごとく百合咲けり

泰山木大ぎ図体梅雨湿り

青葛の遊べるうちの遊蔓

ダダダツと山百合咲いてなだれけり

釣具店昼を点して梅雨籠り

草履ばき素足隆々安来節

梅雨畳じりと踏みしめ安来節

深梅雨の蛭なんのその安来節

魯山人展

涼しさはそめつけ鯨向付

魯山人牡丹帯雨図人だから

ほんにこれ涼しさうなる魚耳水指

涼しかり大人(うし)のそめつけ椿鉢

梅雨明けも間近に備前割山椒

涼しめと織部蟹絵の魯山人

もったいながり屋の吾の性分厚着して

いつのまにか生きてしまった生身魂

筈は何處にでも出る度し難し

未然終止連体ナニナニ息白く

花よりも蔓鉄線は古風が佳し

見上げたる目を緑陰の枝伝ひ

公園の緑陰を鳥はすかいひに

公園の緑陰街騒音縦横

緑陰に重なり透ける葉のかたち

公園の大緑陰の風太郎

緑陰に入り深緑浅緑

緑陰に読める男と女かな

高架駅泰山木の花覗く

花合歓の朱々もろうとせる部分

花合歓のおぼつかなさも朝まだき

空模様茫洋として忍冬花

こんどは腎臓がおかしいとて MRI 検査を受けに

病院を訪ねたら心臓と腎臓の往診の間に少し

遊び時間ができた。で　すぐ近くの芝　愛宕神社

に出向いたらなんと千日詣にでくわした。人間歩くものである…………。

鎌倉のあじさいを見たいものとおもって妙本寺に

出かけた。ついでに鎌倉近代美術館の「モガ・モボ展」

が狙いだ。というより源平池の青蓮が真のねらい。

愛宕神社千日詣

深梅雨の検尿の尿絞りけり

病院を抜け来て茅の輪くぐりけり
ほほづきの鉢選り愛宕大権現

運選るごと鉢ほほづきを選びゐたり
ほほづき提げ愛宕千日詣りかな

ほほづきの鉢提げ愛宕大権現
匂ひたつ茅の輪をずいとくぐりけり

千鉢のほほづき縁日立ちにけり
鉢ほほづき雨具抱えて選りゐたり

ほほづきの鉢をかざして求めけり
青鬼灯飛ぶやうに売れ夏神楽

ほほづき縁日笛ひやらひやらとひやらひやらと

坂を危なげ鉢ほほづきを抱えくる
大茅の輪雨具携え潜りけり

鯉の上に鯉乗り上げて夏祓
大茅の輪多少四角くなりにけり

跨がるゝ茅の輪どでつと横たはり

ほほづき縁日婆の足腰鍛え坂
ほほづきを提げて縁日気分かな

鉢ほほづき提げて人波分けゆけり
形代の書きものこそと包みけり

ガード下に点る灯梅雨の御徒町
これやこの七夕竹として生ず

申し訳程度に合歓の小さき花
のうぜんの盛り空前絶後かな

葉ざくらどき奥行きのある木々ばかり
仁王立ち泰山木の花咲けり

梅檀の青実に薄日差しにけり
梅檀の葉のこまごまと梅雨に入る

法華寺大榭緑陰成せりけり
向日葵やここの神主丈高し

鎌倉近代美術館

鎌倉近代美術館

木ささげの葉を透る日も梅雨晴間

モガ・モボ展一渡り見てソーダ水
紫陽花活けモガ・モボ展の喫茶室

水無月の銀座カフェーの女給服
深梅雨の画廊の奥へ進みけり

水無月の蓮にひびく雨の音
蓮の葉に雨砕け散る祭月

水馬降り出す雨にあはてけり
水無月の蓮やはらかく雨受けぬ

水馬雨に追ひ立てられにけり
雨玉をなす蓮の葉のど真ん中

炎天の灼けつく蓮想ふべし
蓮の葉の端持ち雨滴転がしぬ

合歓の花写経いそしみゐたりけり
妙本寺

妙本寺

擬宝珠の花にはじまるお題目

淡々と擬宝珠のやうな余生欲し
妙法の雨妙々とあぢさゐに

寺門まで奥行のあるあぢさゐ道

梅雨晴間著莪を植ゑんと寺男

額の花総門抜けてこゑのあり

こんどは腎臓がおかしいとて MRI 検査を
受ける

病院を訪ねたら心臓と腎臓の往診の間に少
し

遊び時間ができた。で　すぐ近くの芝　愛

宕神社

に出向いたらなんと千日詣にでくわした。

人間歩くものである……………。

鎌倉のあじさいを見たいものとおもって妙

本寺に

出かけた。ついでに鎌倉近代美術館の「モ

ガ・モボ展」

が狙いだ。というより源平池の青蓮が真の
ねらい。

愛宕神社千日詣

深梅雨の検尿の尿絞りけり

病院を抜け来て茅の輪くぐりけり

ほほづきの鉢でも愛宕大権現

運選るごと鉢ほほづきを選びゐたり

ほほづき提げ愛宕千日詣りかな

ほほづきの鉢提げ愛宕大権現

匂ひたつ茅の輪をずいとくぐりけり

千鉢のほほづき縁日立ちにけり

鉢ほほづき雨具抱えて選りゐたり

ほほづきの鉢をかざして求めけり

青鬼灯飛ぶやうに売れ夏神楽

ほほづき縁日笛ひやらひやらとひやらひや

らと

坂を危なげ鉢ほほづきを抱えくる

大茅の輪雨具携え潜りけり

鯉の上に鯉乗り上げて夏祓

大茅の輪多少四角くなりにはけり

跨がるゝ茅の輪どでつと横たはり

ほほづき縁日婆の足腰鍛え坂

ほほづきを提げて縁日気分かな

鉢ほほづき提げて人波分けゆけり

形代の書きものこそと包みけり

ガード下に点る灯梅雨の御徒町

これやこの七夕竹として生ず

申し訳程度に合歡の小さき花

のうぜんの盛り空前絶後かな

葉ざくらどき奥行きのある木々ばかり

仁王立ち泰山木の花咲けり

梅檀の青実に薄日差しにけり

梅檀の葉のこまごまと梅雨に入る

法華寺大榊緑陰成せりけり

向日葵やこの神主丈高し

鎌倉近代美術館

木ささげの葉を透る日も梅雨晴間

モガ・モボ展一渡り見てソーダ水

紫陽花活けモガ・モボ展の喫茶室

水無月の銀座カフェーの女給服

深梅雨の画廊の奥へ進みけり

水無月の蓮にひびく雨の音

蓮の葉に雨砕け散る祭月

水馬降り出す雨にあはてけり

水無月の蓮やはらかく雨受けぬ

水馬雨に追ひ立てくらひけり

雨玉をなす蓮の葉のど真ん中

炎天の灼けつく蓮想ふべし

蓮の葉の端持ち雨滴転がしぬ
合歓の花写経いそしみゐたりけり

妙本寺

擬宝珠の花にはじまるお題目

淡々と擬宝珠のやうな余生欲し

妙法の雨妙々とあぢさゐに

寺門まで奥行のあるあぢさゐ道

梅雨晴間著莪を植ゑんと寺男

額の花総門抜けてこゑのあり

こんどは腎臓がおかしいとて MRI 検査を

受けに

病院を訪ねたら心臓と腎臓の往診の間に少

し

遊び時間ができた。で　すぐ近くの芝　愛

宕神社

に出向いたらなんと千日詣にでくわした。

人間歩くものである……………。

鎌倉のあじさいを見たいものとおもって妙

本寺に

出かけた。ついでに鎌倉近代美術館の「モ

ガ・モボ展」

が狙いだ。というより源平池の青蓮が真の

ねらい。

愛宕神社千日詣

深梅雨の検尿の尿絞りけり

病院を抜け来て茅の輪くぐりけり

ほほづきの鉢でも愛宕大権現

運選るごと鉢ほほづきを選びゐたり

ほほづき提げ愛宕千日詣りかな

ほほづきの鉢提げ愛宕大権現

匂ひたつ茅の輪をずいとくぐりけり

千鉢のほほづき縁日立ちにけり

鉢ほほづき雨具抱えて選りゐたり

ほほづきの鉢をかざして求めけり

青鬼灯飛ぶやうに売れ夏神楽

ほほづき縁日笛ひやらひやらとひやらひや

らと

坂を危なげ鉢ほほづきを抱えくる

大茅の輪雨具携え潜りけり

鯉の上に鯉乗り上げて夏祓

大茅の輪多少四角くなりにつけり

跨がるゝ茅の輪どでつと横たはり

ほほづき縁日婆の足腰鍛え坂

ほほづきを提げて縁日気分かな

鉢ほほづき提げて人波分けゆけり

形代の書きものこそと包みけり

ガード下に点る灯梅雨の御徒町

これやこの七夕竹として生ず

申し訳程度に合歓の小さき花

のうぜんの盛り空前絶後かな

葉ざくらどき奥行きのある木々ばかり

仁王立ち泰山木の花咲けり

梅檀の青実に薄日差しにけり

梅檀の葉のこまごまと梅雨に入る

法華寺大榊緑陰成せりけり

向日葵やこの神主丈高し

鎌倉近代美術館

木ささげの葉を透る日も梅雨晴間

モガ・モボ展一渡り見てソーダ水

紫陽花活けモガ・モボ展の喫茶室

水無月の銀座カフエーの女給服

深梅雨の画廊の奥へ進みけり

水無月の蓮にひびく雨の音

蓮の葉に雨砕け散る祭月

水馬降り出す雨にあはてけり
水無月の蓮やはらく雨受けぬ
水馬雨に追ひ立てくらひけり
雨玉をなす蓮の葉のど真ん中
炎天の灼けつく蓮想ふべし
蓮の葉の端持ち雨滴転がしぬ
合歓の花写経いそしみゐたりけり

妙本寺

擬宝珠の花にはじまるお題目
淡々と擬宝珠のやうな余生欲し
妙法の雨妙々とあぢさゐに
寺門まで奥行のあるあぢさゐ道
梅雨晴間著莪を植ゑんと寺男
額の花総門抜けてこゑのあり

床ずれのしこりとなりし昼寝覚
 お出ましの守宮と暫しにらめっこ
 夏掛のこの感触と抱きしめぬ
 胸剪りし傷口がつる昼寝覚
 改札口七夕色紙つけし竹
 落梅を一つ處に庭そうじ
 妻が出かけ母がでかけしあとを昼寝
 床ずれのある身と知れる昼寝覚
 でで虫の泳げる風のなまぬるき
 思ふたとうりにだんご虫だんご状
 だんご虫だんごを解ひてそろそろと
 褒貶に浮き身棄してさまよう蚊
 解禁図仔細に渡る鮎の川
 夏掛のひやつとせるをあてがひぬ
 夏掛の頼りがたきをことし又
 林火忌の仲間に甘き目の篩
 糸瓜忌の物の見えたる目の篩
 手にとりし団扇ことしもこの絵柄
 さくらんぼ出羽が出回るごとくなり
 わが名呼ばるるまでを扇子の使ひ初め
 花合歓の思ひめぐらす夢半ば
 夏掛のいつしか腹を滑り落ち
 青嵐吹き込む家にうたたねす
 用件を足し戻る道ひめじをん
 ことここに及んでだんご虫の決意
 電話鳴り放しにして昼寝
 天牛の朝飯前の力かな
 空梅雨のうっすら光るだんご虫
 あじさゐの無頼派百合の清純派
 うたたねより覚めてはきはき梅雨雀
 掻き鳴らし我が家自家製氷水
 古畳団扇片手に寝入る妻
 目覚めたる顔に手やれば玉の汗
 昼寝中巨大な束子状の顔
 昼寝して炭酸抜けしやうな顔
 腹の上団扇はたはたさせをりぬ
 炎熱を直方体のビル放射
 口癖のえらいえらいの夏始まる

書く覚悟随所に見えて百日紅
 夏掛して妻と思ひ出話など
 書かでものをごたごた秋灯下
 入院のあの頃七夕前にして
 外来の患者ばたばた古扇子
 知り合ひの看護婦に逢ふ朝涼し
 牢名主めく患者みて部屋晩夏
 七夕の頃に入院せしことも
 夏に向かふ病棟闊歩ギブス組
 古団扇扇ぎて去年の手術譚
 かかりつけ心臓外科の冷房利く
 熊蟬も立小便もしょんしょんと
 術後にしてこんなうまき一氷片
 天然の涼風窓より浅草線
 納涼船案内車中に流れゐる
 ダンス教室俳句例会梅雨明けず
 半島の空をテッペンカケタカと
 冷房のあまりに強くへたばりぬ
 ぐーたらな亀の麩に明易き
 内職洋裁にて戦後を乗り切りし母曰く
 黄泉にては閻魔の禪の丈詰めん
 炎ゆる昼やり過ごさんと三尺寝
 汗っかき大漢にして大ジヨッキ
 あまご棲む天竜美林映ず川
 * * * * *
 蔓血気壯ん板東武者の國
 蔓蔓へ未生以前はそもさんと
 梅雨どきの眼ごろごろ使ひ過ぎ
 おおらかに海辺の蔓のすさびごと
 蔓ひよんな弾みで向かふ東（ひんがし）へ
 水無月の蔓は虚空に関ヶ原
 床ずれのしこりとなりし昼寝覚
 お出ましの守宮と暫しにらめっこ
 夏掛のこの感触と抱きしめぬ
 胸剪りし傷口がつる昼寝覚
 改札口七夕色紙つけし竹
 落梅を一つ處に庭そうじ
 妻が出かけ母がでかけしあとを昼寝

床ずれのある身と知れる昼寝覚
でで虫の泳げる風のなまぬるき
思ふたとうりにだんご虫だんご状
だんご虫だんごを解ひてそろそろと
褒貶に浮き身棄してさまよう蚊
解禁図仔細に渡る鮎の川
夏掛のひやつとせるをあてがひぬ
夏掛の頼りがたきをことし又
林火忌の仲間に甘き目の篩
糸瓜忌の物の見えたる目の篩
手にとりし団扇ことしもこの絵柄
さくらんぼ出羽が出回るとくなり
わが名呼ばるるまでを扇子の使ひ初め
花合歡の思ひめぐらす夢半ば
夏布団いつしか腹を滑り落ち
青嵐吹き込む家にうたたねす
用件を足し戻る道ひめじをん
ことここに及んでだんご虫の決意
電話鳴り放しにして昼寝
天牛の朝飯前の力かな
空梅雨のうつすら光るだんご虫
あじさみの無頼派百合の清純派
うたたねより覚めてはきはき梅雨雀
掻き鳴らし我が家自家製氷水
古畳団扇片手に寝入る妻
目覚めたる顔に手やれば玉の汗
昼寝中巨大な束子状の顔
昼寝して炭酸抜けしやうな顔
腹の上団扇はたはたさせをりぬ
炎熱を直方体のビル放射
口癖のえらいえらいの夏始まる
書く覚悟随所に見えて百日紅
夏掛して妻と思ひ出話など
書かでものをごたごた秋灯下
入院のあの頃七夕前にして
外来の患者はたばた古扇子
知り合ひの看護婦に逢ふ朝涼し
牢名主めく患者みて部屋晩夏
七夕の頃に入院せしことも

夏に向かふ病棟闊歩ギブス組
古団扇扇ぎて去年の手術譚
かかりつけ心臓外科の冷房利く
熊蟬も立小便もしょんしょんと
術後にしてこんなうまき一氷片
天然の涼風窓より浅草線
納涼船案内車中に流れゐる
ダンス教室俳句例会梅雨明けず
半島の空をテッペンカケタカと
冷房のあまりに強くへたばりぬ
ぐーたらな亀の麩に明易き
内職洋裁にて戦後を乗り切りし母曰く
黄泉にては閻魔禪の丈詰めん
炎ゆる昼やり過ぎさんと三尺寝
汗つかき大漢にして大ジョッキ
あまご棲む天竜美林映ず川

*
蔓血気壯ん板東武者の國
蔓蔓へ未生以前はそもさんと
梅雨どきの眼ごろごろ使ひ過ぎ
おおらかに海辺の蔓のすさびごと
蔓ひよんな弾みで向かふ東（ひんがし）へ
水無月の蔓は虚空に関ヶ原

亀鳴かす程でなくともこの俳味
火がとほつて来たと湯豆腐動きけり
脳朧俳句始めて云十年
熟柿皆承知年貢の納め時
それとなく云ひ出して昼冷素麺
汗くさき肌着ステテコシヤツの山
歪性の百合は真上の天向いて
工面して杜の鳥の集むもの
一政の上目使ひの鯉かな
梅雨鴉けふは出ばつて近所の樹
近所まで子育て季の杜鴉
勝力士ずうつととんで琴ヶ浜
はんちくな齢を取るまじ豆の飯
夏迎ふ駝鳥に片減りしない脚
蕎麦啜る音に人品骨柄まで
道をしへ跳躍すでにしてあやふや
目借時沽券てふ字が書けなくて
正面の滝を見据へて顔ややと
あじさゐの毬に見事に乗りし色
五月雨の音と聴きつゝまた寝入る
五月雨の風を交へし音に覚め
俳優伊藤雄之介昭和五十五年没
時代の眼涼しく使ふ雄之介
「ことし又」「あたりき」神興かくと云ふ
アルバムは写真の墓場梅雨深む
菖蒲湯の菖蒲に寄せぬ術後の身
道行きの鎖言葉に梅雨始まる
悪態をついて頭上の梅雨鴉
雛芥子の真昼うたたね夢ノ介
MRI検査
こはれもの腎臓映し出され梅雨
梅雨浅く妻病む膝小僧関節症
なんとなく梅雨めく雨の音と聴く
アメリカンチェリー一粒底光り
梅雨深みゆくもアメリカサクランボ
流線型目で味おうてサヨリなり
浅春の闇のとりもつ眠りかな
馬鹿貝の弟分の潮吹採れ

普段着の海月の単衣よかりけり
そら豆の莢から飛び出す祭月
陽足らずの枇杷のもと過ぎ通院す
母が云ひ妻云ひはうれんさうの験
露剥きの膝を払ひて立ち上がる
蝸の里の辺りと聞き及ぶ
酔海鼠の感触覚えみたりけり
かまつかとサルビアの赤競ふ季
大暑の頭巡らすよいやさよいやさのさ
のうぜんに漢名あり
漢名は目赫（もつかく）爛れし夕空に
のうぜんの似たり寄つたり花なだれ
咲きますと口を揃へてグラジオラス
花も実もあげて仏のもの蓮
白蓮仏の花と決めつけて
心臓病外来患者に百日紅
凌霄に母屋とられし木が一つ
貝原益軒「花譜」
のうぜんは脳破る花そを嗅ぐな
祭の子弔遊びの町内湯
番台に嬬陣取る夏場所ぞ
荒神輿掠め珊瑚樹実のポツポ
風鈴のチリとも鳴らぬ一番湯
濡れ縁に雨の吹き込む一番湯
諸々の匂ひの中の夜店の灯
岐阜提灯彩どる色の基三つ
挫折にもいろいろありてのうぜん花
虚子直々指南盛夏のあほだら経
終は散り継ぎながら咲ける花
連れ合いの渾名呼ばるる牡丹寺
三伏の我が身一つを持て余す
静岡県 島田
ざりがに捕と云へば昔の疎開先
身空てふ言葉も吾も梅雨に古り
身空てふ言葉も死語に団扇風
深梅雨の古本の背をはたきけり
小雨の中花全うす夏椿
清音に韻きよき沙羅咲けるなり
まなぞこに去年の焰色の葉鶏頭

境内に夏洞櫂二本かな
櫂樹下射的屋夜店出しにけり
手を膝に金魚屋親爺目を配る
氷柱をどすんと据へてラムネ売る
金魚掬い掬い損ねしへっぴり腰
暗闇に山車遠ざかる笛太鼓
足のつぼこんろん揉みてより昼寝
諸掘の朝飯前の莫迦力
怪鳥を出して見せうぞ雲の峰
淡彩の単細胞のあめんぼう
雨音のそこらを打てる三社祭
さるほどに流布本平家寝落ちたり
天日干し鯉を吹けり時津風
足腰の弱り案じて八九月
あちこちに降りて世話やくはたゝ神
梅雨雀何か追い詰めたる羽音
水ばかり掬ひて金魚何時掬ふ
射的屋の手持ち無沙汰も夏祭
なまぬるき太鼓テケテケ夏祭
独り言つこれが釣鐘人參と
夾竹桃ブツダガヤなる聖地あり
一望にじゃがたらいもの花畑
筒花のはらほろひれと金魚草
とりついたりとりつかれたり葛の蔓
白粉花紅白紅白紅
山路ゆくおのが足音額の花
漢名の音（おん）も締りのよくて紫微
馬面の駒草切りぬ霧雫
からす瓜真白き花の怯え咲き
何するにも大勢は佳き豆の飯
梯梧の里あゆたやささんた高らかに
夕菅の花に淋しさこみ上げて
アマリリス程の大きな花が好き
海好きの画家が殖やして浜おもと
焦点を定める如く水引草に
見栄えせぬもの一つに父子草
万遍なく日の当りをる母子草
葱坊主にすいと写楽の役者顔
こだはりなき処が身上スイトピー

押し黙り雨の庭木の紋鵜
それはそれで趣ありぬ霞草
どう見ても庭木に向かぬ郁子の花
混み入ってをりぬ躑躅の花も宇も
咲きさうな処に咲きぬ二輪草
どこ指して馬の脚形ちは言はむ
油菜に適ふ日差しが降り注ぎ
屈まれば景色降りくる葱の擬宝
軟弱な茎をとがめぬはなむぐり
遊歩道左廻りに梅の花
がつくりと見せ場つくりぬ緋の牡丹
そつとして置いてくれよとだんご虫
病みつきに水栽培のヒヤシンス
渡来してコアラの國の花ミモザ
見てくれの何とも妙な猫の目草
いい加減降って止む雨花南瓜
今年の七夕に入院手術今年の七夕は抜糸な
れば
願の糸我には術後の抜糸かな
大手術して一年やビール注ぐ
蝸に啼かれて思ひ立てる旅
秋刀魚焼く煤け寒山濛々居士
降りかかる雨を咎めず宮城野萩
敬されて長寿日本國老人
夜顔や老人ばかり殖ゆる世に
ここんどご無沙汰残暑見舞出す
舗道は未だ夜の冷えを帯ぶ朝曇
古団扇持って宿六引っ込みぬ
遠花火ポツと上がるは安房上総
青くわりん既に一徹者の貌
亀鳴かす程でなくともこの俳味
火がとほって来たと湯豆腐動きけり
脳朧俳句始めて云十年
熟柿皆承知年貢の納め時
それとなく云ひ出して昼冷素麺
夏着出す肌着ステテコシヤツの山
歪性の百合は真上の天向いて

工面して杜の鳥の集むもの
一政の上目使ひの鯉かな

梅雨鴉けふは出ばつて近所の樹
近所まで子育て季の杜鴉

勝力士ずうつととんで琴ヶ浜
はんちくな齢を取るまじ豆の飯

夏迎ふ駝鳥に片減りしない脚
蕎麦啜る音に人品骨柄まで

道をしへ跳躍すでにしてあやふや
目借時沽券てふ字が書けなくて

正面の滝を見据へて顔ややと
あじさゐの毬に見事に乗りし色

五月雨の音と聴きつゝまた寝入る
五月雨の風を交へし音に覚め

俳優伊藤雄之介昭和五十五年没
時代の眼涼しく使ふ雄之介

「ことし又」「あたりき」神輿かくと云ふ
アルバムは写真の墓場梅雨深む

菖蒲湯の菖蒲に寄せぬ術後の身
道行きの鎖言葉に梅雨始まる

悪態をついて頭上の梅雨鴉
雛芥子の真昼うたたね夢ノ介

MRI 検査
こはれもの腎臓映し出され梅雨

梅雨浅く妻病む膝小僧関節症
なんとなく梅雨めく雨の音と聴く

アメリカンチェリー一粒底光り
梅雨深みゆくもアメリカサクランボ

流線型目で味おうてサヨリなり
浅春の闇のとりもつ眠りかな

馬鹿貝の弟分の潮吹採れ
艶姿海月の単衣よかりけり

そら豆の莢から飛び出す祭月
陽足らずの枇杷のもと過ぎ通院す

母が云ひ妻云ひはうれんさうの験
露剥きの膝を払ひて立ち上がる

蝸の里の辺りと聞き及ぶ
酔海鼠の感触覚えたりけり

かまつかとサルビアの赤競ふ季

大暑の頭巡らすよいやさよいやさのさ
のうぜんに漢名あり

漢名は目赫（もっかく）爛れし青空に
のうぜんの似たり寄つたり花なだれ

咲きますと口を揃へてグラジオラス
花も実もあげて仏のもの蓮

白蓮仏の花と決めつけて
心臓病外来患者に百日紅

凌霄に母屋とられし木が一つ
貝原益軒「花譜」

のうぜんは脳破る花そを嗅ぐな
祭の子笄遊びを町内湯

番台に嬬陣取る夏場所ぞ
荒神輿掠め珊瑚樹実のポッポ

風鈴のチリとも鳴らぬ一番湯
濡れ縁に雨の吹き込む一番湯

諸々の匂ひの中の夜店の灯
岐阜提灯彩どる色の基三つ

挫折にもいろいろありてのうぜん花
虚子直々指南盛夏のあほだら経

柊は散り継ぎながら咲ける花
連れ合いの渾名呼ばるる牡丹寺

三伏の我が身一つを持て余す
静岡県 島田

ざりがに捕と云へば昔の疎開先
身空てふ言葉も吾も梅雨に古り

身空てふ言葉も死語に団扇風
深梅雨の古本の背をはたきけり

小雨の中花全うす夏椿
清音に韻きよき沙羅咲けるなり

まなごこに去年の焰色の葉鶏頭
境内に夏洞樗二本かな

樗樹下射的屋夜店出しにけり
手を膝に金魚屋親爺目を配る

氷柱をどすと据へてラムネ売る
へっぴり腰なんぞで金魚掬へぬぞ

暗闇に山車遠ざかる笛太鼓
足のつぼこんろん揉みてより昼寝

諸掘の朝飯前の莫迦力

怪鳥を出して見せうぞ雲の峰
淡彩の単細胞のあめんぼう
雨音のそこらを打てる三社祭
さるほどに流布本平家寝落ちたり
天日干し鯉を吹けり時津風
足腰の弱り案じて八九月
あちこちに降りて世話やくはたゝ神
梅雨雀何か追い詰めたる羽音
水ばかり掬ひて金魚何時掬ふ
射的屋の手持ち無沙汰も夏祭
なまぬるき太鼓テケテケ夏祭
独り言つこれが釣鐘人參と
夾竹桃ブツダガヤなる聖地あり
一望にじゃがたらいもの花畑
筒花のはらほろひれと金魚草
とりついたりとりつかれたり葛の蔓
白粉花紅白紅白紅白紅
山路ゆくおのが足音額の花
漢名の音（おん）も締りのよくて紫微
馬面の駒草切りぬ霧雫
からす瓜真白き花の怯え咲き
何するにも大勢は佳き豆の飯
梯梧の里あゆたやさんた高らかに
夕菅の花に淋しさこみ上げて
アマリリス程の大きな花が好き
海好きの画家が殖やして浜おもと
焦点を定める如く水引草に
見栄えせぬもの一つに父子草
万遍なく日の当りをる母子草
葱坊主にすいと写楽の役者顔
こだはりなき処が身上スイトピー
押し黙り雨の庭木の紋鶉
それはそれで趣ありぬ霞草
どう見ても庭木に向かぬ郁子の花
混み入ってをりぬ躑躅の花も字も
咲きさうな処に咲きぬ二輪草
どこ指して馬の脚形ちは言はむ
油菜に適ふ日差しが降り注ぎ
屈まれば景色降りくる葱の擬宝

軟弱な茎をとがめぬはなむぐり
遊歩道左廻りに梅の花
がつくりと見せ場つくりぬ緋の牡丹
そつとして置いてくれよとだんご虫
病みつきに水栽培のヒヤシンス
渡来してコアラの國の花ミモザ
見てくれの何とも妙な猫の目草
いい加減降って止む雨花南瓜
昨年の七夕に入院手術今年の七夕は抜糸な
れば
願の糸我には術後の抜糸かな
大手術して一年やビール注ぐ
蝸に啼かれて思ひ立てる旅
秋刀魚焼く煤け寒山濛々居士
降りかかる雨を咎めず宮城野萩
敬されて長寿日本國老人
夜顔や老人ばかり殖ゆる世に
ここんとこご無沙汰残暑見舞出す
舗道は未だ夜の冷えを帯ぶ朝曇
古団扇持って宿六引つ込みぬ
遠花火ポツと上がるは安房上総
一徹者の風貌既に青くわりん

かつての鄙びた共同湯が懐かしくて今年の夏休みは妻と子ども

奥会津の檜枝岐村へ。ここへ二泊。一日は尾瀬沼へ。沼尻は

もう秋が忍びよっていた。宿の女将は四十年代 代々檜枝岐歌舞伎

を演じてきた家系で女将の晴れ姿をえがいた一枚の子供の図画は

上出来だった。

つづいて日光に一泊。昨年出来た小杉放菴記念日光美術館をまづ拝見

古川龍生の昆虫戯画卷は圧巻だった。こんな画家もいたのだ。

翌日は中禅寺湖畔にもう一泊。光徳牧場から湯滝へそこから

戦場ヶ原へ。心臓の病持ちにはきつい散策 疲れてはひっくり返り

また起きあがっては歩くといった寸法で四日を満喫した。

家に返ったら友より定年退職の挨拶状が一通とどいていた。

ときは確実にすすむものと実感した。

穂芒と大待宵草の村はずれ

檜枝岐小学校脇蕎麦畑

檜枝岐村の夕立幕間めく

屋根抜かんばかりの夕立檜枝岐

打ち屈むなかでも明き吾亦紅

木道ゆく福島弁は蜻蛉の中

車前草の新しき穂と古き穂と

人気なき村にバス待つけんぼなし

歌舞伎舞台屋根の夏草つんつんと

べんべんと夏惜しむべく農歌舞伎

木道のここら一帯とりかぶと

大姥百合キツと沼辺の雨上がる

黙しゆく雨の木道コバギボシ

櫛の木の霧にチョッピリもみぢして

湿原の横から一声夏鶯

熊笹に盛夏の雨の音確か

雨しとど重き首垂れ吾亦紅

湿原の雨に滲める吾亦紅

蜻蛉の人懐っこさも奥会津

露草の藍も深々奥会津

滝風に吹き上げられて赤とんぼ

べんべんと農民歌舞伎蛾の飛ぶ中

山毛櫨丸太ドスンと秋の土へ降ろす

がまづみの霧にばっちり長蔵小屋

からからのぎしぎし寂れスキー場

がまづみの葉を動かして山の雨

会津高原何處まで芒の穂の赤う

シラビソの霧より抜けて霧の色

夏雲の濃ねず薄ねず奥会津

天牛が網戸を這へる宿の朝

天牛のぎうぎう朝が来しと云ふ

木道の下よりかがんぼ現れて

水芭蕉だんびろの葉に通る雨

木道をペタペタ歩けば大姥百合

沼尻の雨ししうどの花叩く

つりがねにんじん付着雨滴の粒細か

沢枯梗沼もその色欲しさうに

沼風にごつつんこして吾亦紅

湿原に短き夏の草の花

蜻蛉の霧に湿りし羽根ふると

ししうどの花の高さに沼の雨

木道は長蔵小屋へ沢ききよう

蜻蛉の面白がりぬ草の揺れ

霧来れば阿修羅見す木ぞ岳樺

木道のここに集まれ振花ぞ

木道にひっくり返れば蜻蛉の空

女たち日焼け止めして尾瀬沼行

弁慶の立往生の枯れ榎松

水芭蕉過ぎぬし沼は雨の中

墓原の裏表なくコオニユリ
足投げて疲れをとりぬ鳥兜
湿原にこゑ秋寂びぬハンゴウ草
往きは雨戻りは日照コバギボシ
つりがねにんじん風欲しさうに沼尻に
大瑠璃の間近も間近何處で啼く
のうぜんの花も我が身もくたくたに
檜枝岐花豆の花空昇る
芒赤う秋が一足さきに来ぬ
のうぜんの散りざま見るも疲るるよ
峠路の朴の蜻蛉雲に触れ
稲の香に顔なぶられて奥会津
もろこしと芒の糸の白と紅
露天湯へ黒逞しき黒揚羽
もろこしの花暮れがたき檜枝岐
街道に面す墓原コオニユリ
沼巡り背のぬくければ背へ蜻蛉
檜枝岐日の暮れるぞと夕燕
露天湯の板塀奔る葛の蔓
洗ひ場にて蜻蛉の羽根をぶるると
車百合かたへに間引六地藏
うまのあしがた薄日差したり差さなんだり
遠方に蝉啼いて朝やつて来る
竹煮草曲る度見てうんざり顔
檜枝岐蟬の出番はとうに過ぎ
会津高原大待宵草の丈によつと
沼尻より人現れて吾亦紅
この啼き方聞けばメボソムシクイと
振り返る彼方に沼と吾亦紅
ここ大きくへアピンカーブやなぎらん
沼尻を秋吹き渡る草の音
ポツと来て雨ポツポツとがまづみへ
ふいに霧雨ニッコウキスゲの横顔に
尾瀬沼の蜻蛉淋しければ群るる
健脚の尾瀬沼あざみ脇抜けて
橡粥に朝の食欲進みけり
青栗に滾ちて朝の川の音
滝落下して水視界より去れり
正宗の鉄灯籠に赤蜻蛉

朝顔の鉢店に入れ雨に当てず
原っぱのここは蜻蛉の飛行場
沼辺より翔ちて蜻蛉の飛行艇
盛夏なる雨光り降る陽明門
権現様御遺訓読めば夕蝸
家康公御廟きささげ青葉して
勝道上人
黒一塊晩夏の日光開山像
蝸に七八強飯受者の札
蝸に当病平癒無事祈願
一驟雨日光街道駆け抜けて
滝つ瀬の刹那刹那の音繋ぎ
滝壺へ朴の青葉を踏みしめて
滝音の止まるときつゆ無かりけり
南瓜蔓日光街道へ走り出づ
滝頭薄き日差しを浴みにけり
鉄鎖より錆を貰ひて赤とんぼ
赤とんぼ雨にもめげず奥会津
蕎麦畑の上にはほっかり朝の靄
蕎麦の丈まだ小さうて檜枝岐
滝落ちてアオダモの木に轟けり
雨に啼く蝸家康公神柩
つくつく法師復唱受持解説読誦書写
霧呼んで一寸蕎麦の丈伸ばす
鳴龍に神（シン）の入りたる秋初め
男体山の空をめぐけて夕燕
別名を鳥肌立の滝となん
日光山一巡りして密豆
いろは坂バスに揺られて昼寝どき
日本両棲類研究所
中禅寺湖にようこそニッコウサンショウウオ
オ
煤け顔起こして大陸サンショウウオ

夏瘦と云ふて心の弱る日も
夏瘦てふ顔を同車の向ひの者
夏瘦てふ顔を車中に探しけり
転落死迎ふ覚悟は出来て蝉
空蝉の泥に残せし糞力
誰彼の口を合はせて秋風云ふ
秋興の扇肋で起こす風
秋興の埃立たせて雨の来る
縦あふぎはた横あふぎ団扇風
大昼寝濁世に用はなかりけり
転落死する腹出来て油蝉
隣席の扇の風にあやかりぬ
夏惜しむ心を当てに便りせり
嗚呼無情定年一步近づく夏
立秋と云はれて空の海のいろ
立秋と云はれて街の空のいろ
処し方も風船かづらのこの呼吸
角とれし人にふうせんかづらの朝
転落を何處吹く風の朝の蝉
わが持論一步譲りて団扇風
立秋と云ひて心に起てるもの
啼き疲れせる蝉あらむ朝の杜
立秋とまづ書き出してあと書き足しぬ
鈴懸の連なる幹に街明けぬ
吾が職場
主なき机の海の夏休み
立て混める週を外して夏休み
ずずいと展け萍畳かな
兎も角も尾瀬は花咲きゐて晩夏
尾瀬沼蘆などてふ蘆を見て戻る
冷し狸冷し狐がよくでて夏
勤務先未だある裡の夏休み
頭上にて蝉の奴等めかまびすしゅう
滝つ瀬の音に繋ぎ目なかりけり
終わりのほう端折らずぼらな法師蝉
狼狽へる蝉に幹貸すあすなろう
すいっちよと云ひて足音しのばせゆく
隠元の棚高く組む暮し向き

結局は一日蝉を聞く羽目に
うだうだと頭でつかち蝉啼けり
朝から運河のほふ盆の入
対岸のあれこれ見へぬ盆の入
落蝉を二三見て来て朝ご飯
盆の入電車幾分空いてをり
盆の入けふも電車に運ばれて
玉の汗球児激突甲子園
二三言いひて寝落ちぬ盆の入
母とある日の何時までか芋殻焚

広大な蓮田の中に吾が少年時代の遊び場は
あつた。

一面の蓮の中に屈んでの蜻蛉捕り ザリガ
ニ捕り。

それが埋め立てられ一枚の蓮田すら見られ
なくなつた。

郷愁は蓮田を求めて。今夏は三溪園のそれ
を見に出かけた。

朝蟬。夜蟬。能八島。風呂敷展。アーネス
ト・サトウ展。

関羽生誕祭と句材を探つた。

風通しよき蓮田とおもひけり

この蓮開き始めて何日目

蓮咲いてくたびれ具合も三四日

蓮葉の大きなやつがはたと昏れ

炎昼をへたばりをと誰が云ひし

うつくつと蓮の奥より誰がこゑ

蓮の香かすかにふふむ風立ちて

蓮葉の葉裏白々風渡る

蓮咲くと聞けば出かけてゆきにけり

蓮弁のグラデーションを愉しめり

蓮の葉の下闇幽界なせりけり

立葵何處向いて咲く何處向いて

寝返れば傷口ひくと夜の秋

芙蓉咲く時分ではまだなけれども

ごろ寝して何處にも行かず明日は秋

ジャワ更紗蓮田の風に吹かれゆく

蓮を吹き払ふ大風目で追ふて

紅の荷花のほとりに何語る

蓮を見る目許のいろも淡々と

夾竹桃嘗て市電の馳せし街

塩辛蜻蛉（しおから）の尻尾の他はかすみ
をり

反動の分子然たり水馬

何物かハリと音して蓮の奥

お天道様蓮の葉脈透きにけり

連弁は唐紅に限取られ

蓮田べり蜻蛉のついと現れて

蓮の茎エイとへし折る棒っ切れ

蓮田べり亀の子ぶかぶかやつてをり

亀の鼻蓮の間をぐいぐいと

物音のかい潜りきし蓮の風

蒲焼は正真正銘ジャポニカ種

蒲焼きの鰻は品薄ジャポニカ種

みんなの朝から力入れて啼く

パンにバターじわつととろけ朝の蟬

三四日前から朝顔咲き出しぬ

朝蟬のいやに啼くとき啼かぬとき

朝蟬に躰を伸ばし眼をこすり

夾竹桃寝ぼけ眼にピンク咲き

朝蟬のキツと離るる羽音かな

朝から張り詰めて啼く油蟬

一段落せしと夜蟬の独り言

そら来たと白雨に掌を差し伸べて

アロハ着てはしやぎたくなる気の未だあり

入れ替り十日程とる夏休み

あがき振りさして変わらぬ油蟬

一変し俄黒雲夕顔に

夕立の運河叩きて港町

盲蟬ぶつかる音にまどろまず

氷水落ち着くところに落ち着きぬ

蟬時雨だまらっしやいと夕立来

はらからは屈んですなり芋殻焚

三人で屈んで今年の芋殻焚

頭の中のもやもやとるに鰻食ぶ

鳥啼くとき蟬啼くときと明けて来ぬ

うなされし如くに三（み）声夜の蟬

不景気を先ずは直せと蟬申す

法師蟬しゆくと口調も泣き落とし

敗戦日と云へば母の答へて

疎開地の機銃掃射の諸畑

扇面の縁にて起こし風送る

二夏を経たる金魚を死なしめき
わが肋蟬も肋を上にして
蟬事と思ふな蟬の転落死
寝苦しさばやくが如く夜の蟬
鼻声に何か言ひたげ朝の蟬
夏草を引きちぎっては歩むのみ
あふむけに蟬の立派な肋骨
雨毎の延びが愉しみ葉鶏頭
蟬みんな出た跡これもそれもあれも
厨房にて真夏の中華鍋鳴れり
厨房へ徹る真夏の広東語
飯店涼しく注文を取る日本語
山珍の中華料理に暑気払ひ
灼け紅旗へんぼん関羽生誕祭
飯店の盛夏の食譜前にして
中華街楼門を抜け片陰ゆく
夏休みの子等と横濱開港圖
旧英国領事館脇氷菓店
土用波波の裏より手が伸びて

簾して肋をさすりつゝうたたね

手花火の音の奇天烈奇天烈と

不景氣を一蹴せんと揚花火

漂ふて花火の煙の大海月

おん母の命を伸ばす花火音

すとんと初手の花火があがりけり

児雷也のでれつくでんの花火玉

一人に夜目の白さのさるすべり

空焦がす音のちりちり花火了ふ

湯舟よりとちりちんと夜の秋

お昼寝の面付き直せ古女房

甲子園返り日焼けの極付

笠知衆並みの細目に秋の雲

紅葉狩心臓病につき辞退

秋蟬の遠く蔵書を死蔵して

朔日のぼんと出さるるとろゝ飯

何に付けきゅつとやらねば盆最中

ぶだう食ふ渋ある故の甘味なれ

秋秋と尾鰭を付けて啼く蟬も

朝が来て一気呵成の油蟬

水中の葡萄の粒の気泡抱き

晩節の大浪に乗り白鷗

鼻つまみ蟬も紛れて啼きをらむ

連れ鳴きの末はだらけて法師蟬

弥生尽釈迦力に句を産んで

空蟬の脚を厚葉に初一念

臍に込む俳諧力秋扇

月並みを恐れず恥じず名月吟

ろくすっぽ捕れぬ鰻に舌鼓

目覚めよき肋の上を秋の風

停年を目の前にして三尺寝

それとなく後事を託し芙蓉落つ

油蟬一世一代の莫迦騒ぎ

四月馬鹿達者と云へる褒め言葉

揚花火願ひましてはご破算と

女松原意気軒昂の油蟬

蕃茹・蜀黍・似勢俳諧を褒め言葉

秋蟬のどうりきんでも墜落死

俳諧の奉行何処に豊の秋

|

角田武夫「金澤百景」水彩風景画展

蝉死して三角形の羽根と胴

油蟬櫻の幹と一丁相撲

堤の櫻日露戦勝記念樹よ

油蟬昔を今に水彩展

八景も歴史の波に蝉しぐれ

寺前の大銀杏脇氷店

洲崎集船所

横須賀へ舟賃五十銭の秋

注書きは九月某日旗日の景

小泉の夜雨も棒状筆涼し

社好き瀬戸明神の油蟬

瀬戸明神の杜の蝸聞こえぬか

金澤八景駅

秋分の木造駅舎の日章旗

境内の蟬の穴穴総もぬけ

蝉捕の人つ子独り居らぬ杜

泥亀も首をすぼめて盆休み

俳諧を教ふ手管のくだらなさ

俳諧を教ふ手管の何處にある

しみじみと先を急がず法師蟬

世之介の昼寝の涎ぬぐひやれ

たちどころ詠んでとつたる秋の風

心音も至極尋常明日は秋

懐旧

退院手続きすたこらさつさの朝曇

かまつかを吹き抜く風に色載らん

家中までずいといと蟬音あつかまし

藪つ蚊の金属音の急降下

急雨にもいけしやあしやあの法師蟬

あな蟻の門渡り風船葛にも

白芙蓉後事託すと云ひて墜つ

秋雨の音の拡がる枕上

颱風の何処へ抜けやうかと腐心
受け売りのコンコンチキが花鳥説く

山だしのししうどの花盛りなり
夕立のあとのむむっとする中に
わたつみに鳴神墜ちてどっぴんしゃん

夕立が上り辺りのなまぐさし
ダリエンソ手練手管のピアノの涼
低音部利かせ夜涼のダリエンソ

信貴山秘宝展 横浜そごう美術館
信貴山縁起絵巻 飛倉巻

謂れ莢か朝護孫子寺てふ寺名
露の鉄鉢長者の倉を持ち上げて
倉戻せとおらぶ長者の声も秋

飛倉は野山の錦一つ跳び
鉢と倉追ひゆき粧ふ信貴山へ
命蓮の法力使ふ秋天下

命蓮聖（みょうれんひじり）念力えいと秋
の空
稲雀飛び立つやうに米俵
澄む空をぶうんと長者の米俵

信貴山縁起絵巻 延喜加持巻
命蓮の法力さわに山河越え
信貴山より剣の護法秋天馳せ

信貴山縁起絵巻 尼公巻
卷裾を尼公のゆく豊の秋
尼公のてくてく歩く道の秋

奈良近く訪ねて鹿の遊ぶ坂
色変えぬ松をあふぎて尼の旅
大佛の夢のお告げに粧ふ山
命蓮の消息尋ね粧ふ山

伏見人形お福十態秋寂びて

松茸持ちお福てらてら豊の秋
毘沙門天版木真っ黒秋の暮
信玄ガ願掛け毘沙門天露けし
出つくわす秋の芋銭の毘沙門天
秋寂びて菊水旌旗（しょうき）ぼろんぼろん

迷へども持って出かけぬ秋あふぎ
秋出水東夷（あずまえびす）の國々に
まるごと好き斎藤史は一位の実

如何にもこの縞の太々駄目西瓜
ドジ踏んで鳴神落とし損ねけり
一嚙り図体ばかりの梨と知れ

俳諧
神経を区切って詠え夏霞
秋ゆゑの諧をくつきり立たせたたく

落ちぶれし日本の話稲の花
身に余る話をサフラン見やりつゝ
カツカツに食べし世代や蒸かし諸

隼人瓜意地で生き来て今惰性
蒸かし諸に当りそこそこいい話
雀蛤になること容易なこつちやない

衣被何でも塩振る癖のひと
今逢ふておかねばならぬ蟬時雨
水よりも宝井馬琴こゑ澄めり

宝井馬琴
講談の抜き読み名月若松城
一龍斎貞水

白浪物短けえ娑婆に昼の虫
夕焼けに人生纏め上げる詩（うた）
すつと頭を上げて木槿の花あほぐ

浴衣着に一皮むけていい女
かまつかの七八九本朝夕な
秋燈下故人の「故」の字に目を遣りて

そこそこの梨買うて来て褒めらるる
腰折れの扇子使ひつゝむふむと
雑談に骨はばらばら秋扇

雑談に骨はばらばら秋扇

國の春三文俳誌跋扈して
川筋の腕にすつと秋の風
二の腕の歴然とあり秋の風
雑俳の世の蟬穴のおびただし
苦勞性自然薯の身の節々よ
隼人瓜畑の先を通り雨
秋来ると鈴懸は枝刈り込まれ
かまつかのどぎつくそれでいて明朗
作り捨て雑俳程に蟬穴も
腹話術腹の底より秋の暮
わず玉の雨後の薄黄の花明り
水泳の足の切り傷オキシフル
竹煮草雨あたふたと駆け抜けて
ヤブニツケイ一樹自尊の秋立てり
俳誌に五十代六十代特集ありて
ちようしの秋刀魚脂が乗つてこの程度
永田町街路樹沿ひの朝の蟬
烏瓜の花の縮みて昨日あり
積み上げて吾の剥く栗の多面体
瀑音に我を投じて華嚴落つ
立て続け俳句仲間が逝きて秋
秋風も紅燈趣味もそれとなく
つくばねに鬼籍の人と昼の酒
いっばしに日焼けし心臓外科患者
手術前注意こもごも冷房裡

こんなのと母が手拵げ穴惑ひ
すいっちよの闇夜に浮ぶ友の顔
疎遠なるままに逝く友ありて秋
馬追の躰反らして鳴けるなり
虫時雨妻の寝顔のつやつやと
鈴虫の聞き分け難く風起ちて
ぎす鳴いていよいよ妻の阿弥陀顔
蟋蟀の闇夜に妻の阿弥陀顔
残る虫曉近き耳の底
月渡る空朗々と虫今宵
虫滋くなりて廁に起つ暁暗
蟋蟀の何處に翅当て擦り啼き
忘年の酒席にむむと物忘れ
根詰めて仕事にかかる虫の夜
烏瓜の花の辺興味津々と
秋雨にひるむどころかあめんぼう
油蟬もうこれきりの力み声
芙蓉咲き高きは風の通り道
蜘蛛の囀を払ふことなく庭掃除
小雨には小雨の音色ちちる虫
ちちる虫雨の音色と心得て
弁慶草起こし野分の後始末
枕上音立て点ける夜長の灯
気のゆるみ即墜落死秋の蟬
きりぎりす指でまさぐる手術痕
つれあいを亡くせし隣家の木槿垣
ダチュラ見て俳句作りの面白き
草千里一二三と霧湧いて
乳牛に一二三と霧わいて
そを想へば目にちらついて曼珠沙華
糸瓜忌に出来て俗だが氣に入る句
末っ子の庭手入れせる敬老日
色艶よき草花雨の敬老日
精霊バツタの面付き伊藤雄之介
八丈島颯風に入り雨断続
とりとめもなく敬老の日の虫音
かまつかを括りに出でて煽らるゝ
おとといのきのふの風船葛の色

鏡中のお仏壇まで野分晴れ
紅葉狩りなどして定年何のその
わたなかをたらぬく光野分晴
野分して相模の天地照らし合ふ
わたつみに日柱立ちぬ野分晴れ
きしきしと立木が鳴りて颯風余波
光りつゝ喬木きしむ颯風余波
口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ
長き夜の二階にもゐる宵っ張り
書き漏らすことふと秋灯消すときに
しみしみとその黄に見入る女郎花
はっとして胸つかまれぬ女郎花
夾竹桃埃まみれの世に慣るゝ
秋の蚊のこゑはと腕裏返す
かまつかに留守を頼んで出かけけり
大嘘の見極め難く秋扇
颯風に特徴ありて足早型
秋雲と云へる側から風起ちて
チャンチンの幹を秋の日昇り詰め
秋灯を点ける音して隣部屋
敬老日彼の人健在なれば吾も
空元氣出して庭掃き敬老日
かまつかのはだけし胸を風に晒し
一波乱相撲秋場所上位陣
烏瓜不思議や不思議霞み咲き
馬追や畳に積める本の丈
おわり

思い立って妻共々九州へぶううんと飛び立
った。

国東の石仏 臼杵の磨崖佛 耶馬溪 阿蘇
別府 岡城趾 湯布院 と急ぎ足で回っ
た。

国東 臼杵のほとけさまには素直に感服し
た。

国東の仏仏と見歩く秋
稲稔る国東半島首ねっこ

長き夜のつれづれに湯の効能書
月を待つばかり阿蘇谷花すすき
夕日再び阿蘇の芒に差し込みり
車前草の色づくことも岡城趾

サルビアに阿蘇の夕日に面晒し
稲見えて青の洞門明り取
はんみやうが案内の臼杵石仏群
やうやうの櫻紅葉に岡城趾

湯の花は水虫に効く宿夜長
湯布岳に月は昇りて花すすき

臭橙（かぼす）採る畑のあなたに周防灘
耶馬溪の一番黄葉モミジバフウ

露天湯の足下霧島火山帯
満月に阿蘇の芒のコンと鳴く
鬼やんま青の洞門抜け来たる
ゆふいんの雨にぞ零る銀木屋

臭橙提げ帰途の宮崎空港へ
出来秋の雲の中航くほの明り
花すすき阿蘇の外輪経巡りて
秋風に頭でっかち石仏

稲穂波明りす青の洞門に
真向へる吾を嫌ひて穴惑ひ
穴惑大日如来にっこりす
花すすき祖母山（そぼ）傾山（かたむき）

にあまねき日
ゆふいんに妻と遊べば色鳥来
伝へ聞く颱風接近梅もどき

赤牛にここぞと阿蘇の秋没日

馬肥ゆる秋の空路の機内食
天高き頃の空路を胃袋と

由布院の朝鳥啼けり梅もどき
山頂は霧が懸かりて霧千里
日まみれに肥後の赤牛秋草食む

花すすきすいすい阿蘇の登山道
草原に踏み込み阿蘇の露浴びぬ
溶岩原に芒すいすい生ひにけり
芒馳す彼方祖母山傾山

夕日今芒千里の外輪山
高原の向日葵畑露浴びて

霧冷えの俄か阿蘇杉寸詰り
乗馬せる音のもそもそ霧の中
阿蘇谷に霧を呼び込む花すすき
蔓あれば通草の蔓も高千穂峽

鉄漿蜻蛉（おはぐる）は幽冥界の冥纏ひ
花すすき夜盗さながら裾野馳せ
草千里霧の中から馬匂ふ
一団の芒阿蘇谷突っ走る

阿蘇谷を芒一団駆け巡る
団栗の落ち始む道高千穂峽

雲海や国見の須佐之男命顔
ブルーゲンベリア空港ロビーに彩させり
白雨過ぎ南国情緒たつぷり椰子
延々と真澄みの空とフェニックス

明礬温泉
霧雨の吹込む薬用湯ノ花小屋
霧の音肥後赤牛の鼻の先
雲海の端を踏み国見ヶ丘に佇つ

潮けむり日向の國の空澄めり
宮崎の青澄む空へ潮けむり
熊本より来たばい真名井の滝はよか
秋風が通り真昼の神楽の座

高千穂の日当たりながら落つる滝
神楽宿ふくべを濡らす天気雨
紅葉季外れの羅漢寺耶馬溪に
高千穂の神の岩がね秋寂びて

空港へパンパスグラス街道ゆく

日之影町陸稲の段々畑かな
猪垣ややたらめつたら打ち付けて
一つづつもぎとる富貴の柿干
茸狩薩摩おごじよのバスガイド
風倒田颯風日向灘へ抜け
美々津海岸
桜蓼神武天皇舟出の地
猿田彦稲の睡気に移りけり
曼珠沙華右に左に日豊線
日向灘初潮けむりあげにけり
猪垣の峠を越へて肥後に入る
ほほ笑まれ秋の臼杵の岩佛
相まみえ臭橙の里の大日如来（だいにち）
さん
昼蘭けて鳴く虫もなき岡城趾
青芭蕉だらり颯風接近中
びくともせぬ溶岩霧の山麓に
秋蝶は黄なり臼杵の佛等に
阿蘇谷の肥後の赤牛芒分け
荒城の石垣掴み法師蟬
妻も亦ポシエツト族なれば
有袋類おばさん秋の日向路へ
神寂びて日向の國の稲穂波
階段の手摺りに露の点字板
日向路へ空路は露の暁紅便
日田杉のずんと高むや秋の空
秋土産一腹半の明太子
出来秋の罷り通りぬ肥後の國
離陸
露空へ翔てる翼に气流見え
鹿兒島弁丸出しガイド秋讚え
着陸の秋の大地へごつつんこ
大寺の紫苑の上の国東晴れ
国東の仁王顔してぎんなん食む
稲穂波くねりて青の洞門へ
向日葵の百の素顔と阿蘇連山
稲穂波びつかりほっかり豊後の國
日豊線爪先立ちに曼珠沙華
月を待つ大観峯の花芒

ホキ石仏第一群第二龕
あきつ来て最も威厳のある佛
名にし負ふ地獄巡りや霧まみれ
中岳は雲に隠れて花すすき
蟲の音に阿蘇連山の空の澄み
夜長宿宴席の名も草千里
ゆふいんの雨後の川音冴えに冴え
ゆふいんの霧に目の慣れ梅もどき
すすき野を元氣印のガイド嬢
鉄漿蜻蛉（おはぐろ）に羽撃ち疲れといふ
ことなし
榎造り秋の富貴寺の阿弥陀さま
山寺の榎の実匂うふ阿弥陀堂
ゆふいんのおはぐろとんぼ雨を除け
ゆふいんの弾む川音溝蕎麦に
ゆふいんの銀鼠わずこ雨まみれ
地獄巡り霧のむかふは何地獄
霧雨に湯ノ花造り藁葺き小屋
まんじゅさげその朱ケ飛んで宇佐八幡
祖母山の裾のコスモス高かばい
赤茶けし石の仁王の頭にあきつ
光背の唐草紋ももみづりて
草黄ばむ湯布岳朝の霧に浮き
霽れてまた霧らふ湯布岳チョットコイ
霧込めに阿蘇は冷え冷え虫鳴ける
やぶみやうがの白実薄るゝ石佛に
湧水の川面か黝く蜻蛉飛ぶ
光背の彼岸花いろホキ石佛
石佛に願文入れし穴虫音
石佛の風化薬壺に昼の虫
ばった追ひ追ひかけゆきて満月寺
ゆうふいんのゆんべの雨に紫苑臥す
高原の大犬蓼の霧傘
ゆふいんの雨直ぐ上がる溝蕎麦に
川音の著きところに鉄漿蜻蛉（おはぐろ）
来る
汗みずく広瀬神社の磴百段
雨上る川面おはぐろとんぼ飛ぶ
昼の虫臼杵腹欠け磨崖佛

秋 徽雨石の仁王の腹朽ちて
岡城趾追はれバツタの音幽か
笑み給ふ大日如来（だいにち）さんに汗退
けり
阿蘇連山よりも犬蓼丈高く
大日如来（だいにち）さん色無き風に面窶
れ
芒野へ外輪山より降りて来ぬ
痛快や阿蘇の芒に夕日抜け
穂芒や首に阿蘇の日痛いほど
湯のほてりロビー湯女圖に夜の長き
熱泥のべつぷべつぷと秋の雨
石仏に面と向ひて道をしへ
外輪山伝ひに降りくる霧の中
霧霽れて緑むくむく草千里
鉄漿蜻蛉（おはぐる）はタンゴのステップ
踏むごとし
向日葵にサンフラワー号接岸す
稲穂波そぞろ打ち合ふ神楽の里
旅先のああこの匂ひ焼ぎんなん
秋は色づく光の回廊高千穂峡
秋光の充てる回廊高千穂峡
閃々の神楽は手力男の出番
極めつけ神楽戸取（とと）りに夜の更けぬ
秋興に宿のだご汁かつぽ酒
高千穂に氣を抜いて来る秋の旅
露けくて首欠け落ちし佛是

おわり

● HAIKU 19981 Osonoi

烏瓜開花頗る珍にして
棕櫚の花はらはら零れカステラも
斉藤史
無然たる鶏頭に似て史の歌
人の老ひ眺むるごとく鶏頭を
雷公の所持品太鼓古ぼけて
鴻雪録（末廣鐵腸）
噴水遠く望メバ鯨魚ノ潮ヲ吹クカト
旧季題ラムネに明治の活気あり
物数奇がかうじて飾り南瓜となる
俳諧の大道に立つ霜柱
俳諧の天地貫く棒の秋
夏掛をはみ出して臍ありにけり
真みどりのずんぐりむっくりはなむぐり
肩すつと夏掛け頼りなき朝
のんびりした趣柿を滑る蜂
花を詠む言葉を仕立て直さねば
神通力もつて咲かせよ曼珠沙華
正路より岐路に踏入る昼寢覚
柴田宵曲文集
出し洩る本こそよけれ長き夜に
長き夜を読ませる宵曲妖怪譚
燈火親しお化けの眷属出没し
夜長咄狐が人を化かす型
長き夜のエレキにかかると読本
続編に当たったためしなき秋夜
いつまでの秋の長雨やる気失せ
長雨に櫻もみぢの目減りして
宵曲の面目茲にある夜長
おしゃべりをはばかられる虫の闇
穴惑ひこんなのが出るその手つき
コスモスや奥羽に廻る碧梧桐
日露戦争前後コスモス普及せり
流行唄
秋雨の何だかんだの神田橋
結ぶ指開くが如く石露咲けり
熟柿好む齢と云はれさうさうと
秋雨といふ長雨の至り方

枯れに入るもの一つに床擦れも
風邪熱の坩堝の底に朦朧と
曼珠沙華突撃バンザイ花にして
烏瓜失せたる色を思ひつゝ
咳き込めば臟腑七転八倒す
当山の萩は盛りを過ぎ居れり
街中の通りすがりの金木屋
柿色に降り注ぐ日に蜂降れり
風下の揺れコスモスに目がゆきて
捕虫網持つてほつき歩きけり
コスモスやたんたと延ぶ埃道
コスモスの人気なければ昇天す
深秋のバツタ手足の暗緑部
萩寺の名残の萩に二夫婦
玄々堂一派銅板画展
銅板画展ありきささげ黄葉して
コスモスの佳人の如きたたずまひ
コスモスに遠ざかりゆくをみなごゑ
白芙蓉面吹く風の又起り
睡蓮の四方の水面ぴらぴらす
会心の音色きちきちばった翔ぶ
泡立草立往生の川つぶち
かがよへる水の回廊あめんぼう
敗荷田大鯉の鰭余す見ゆ
敗荷の水中をゆく甲羅あり
ヒポクラテス仕草露けき銅板画
石露日和よんどころなき法事あり
鎌倉の法事日和や石露日和
きちきちの風振り切つて降りるなり
秋風起つ道の始めの日本橋
秋風に土牛の白牛首あづけ
冬隣古径の鶴の一光体
青邨の御水取の圖うすずみに
高秋のふどしの観山牧童圖
春草の初冬の兎山を駆く
院展の大観の金観山の銀
実朝忌ますらおの歌鼓吹して
燈火親し古句を孫引玄孫引
歳旦吟淡々水を掬ふごと

言も冴え「偏見強説不勉強」
虚子編の季寄せ一つに足る旅ぞ
稻雀群れて得すること有や
夕づける風船葛きつね色
あらはとは霧の霽れゆく草千里
霧込めののっぺらぼうぞ草千里
虫すだく青の洞門人通す
カルデラを一目たりとも霧の中
嘶きと思はるこゑも霧四辺
逝きてこの空の何處かにきりん草
うろこ雲かの一片は汝が御霊
丈高き汝は紫苑とも穂芒とも
天つ日に紫苑紛れてしまひけり
穂芒の吹かれし方に汝を見る
駅ほとり皆似て稲田葛生線
赤のまま気使ひ呉るる人のなく
耳元に飛びくる言葉薄もみぢ
諸堀に意を強うせる風が吹き
枝々のあらかた透けて梅もみぢ

● HAIKU 19981 Isonoi

百萬回咳けども無くなるものでなし
秋晴れをとかとかとんの家普請
エッセイのとば口に佇つ夜の秋
儲からぬ本こそよけれ衣被
奇怪な石榴に高値付く世にて
風邪明神伏して退散希うのみ
木の実拾ふ妻は何でも有難屋
風邪貰ふ妻は何でも欲しがり屋
起きて寝て会社で家で咳太郎
惜しみなく咳振り撒けり咳大尽
ほうほうの体で逃げ出す咳地獄
流行風邪吾が屋台骨揺らすなり
いい加減纏わり付きし風邪抜けよ
あつあつのけんちん汁に風邪抜かん
コンコンと同じ咳して師走妻
虚子の句に打ち負かされて終る年
棍棒の如き虚子の句読初めに
べら棒の値の付くクリスマスディナーショー
ウ
朝来ると八つ手の花の瞬きて
風邪熱に舌がやられて鼻も駄目
咳ごゑの喉の辺りをうろろす
漱石も迷ひし阿蘇の芒原
釘抜けば悲鳴をあげる鴟日和
風邪の身の紅茶砂糖をふんだんに
風邪熱の舌にあつあつ味噌汁ぞ
家建てる音呼応して冬隣
槌音のびたりと止みぬ秋の暮
風邪の身は熟柿の如くほたほたす
秋燈下勢ひし日には勢ひし書
鳥渡る頃の空とは知り居れど
とかとんと金槌振ふ敬老日
風邪の食事黙々食せば馬のやう
鶏頭の今年の種を見せに来る
鶏頭の種干し日和うち続き
薬処方さる
こんなにも朝昼晩の風邪薬
家普請景気良き音に八つ手咲く

しみしみと風邪寝の床にさす秋日
八つ手咲き初めし通勤通学路
腐れ縁未だ続き氷頭膾
居直れる風邪を追い出す粉薬
店頭の本に目利きの要る秋ぞ
黄落期何だかんだの本探し
足が向き神田古本まつりかな
古妻に風邪移りたる移したる
秋日の汝の弔い駈けつけん
飛び方が目に見ゆきちきばったかな
咳をする奴は不埒といふ目付
鮮しき息するやうに花八つ手
差し芽してつきたる菊と聞かさるゝ
色もよくこれら実生のサルビアぞ
冬菊の咲いて毎年同じ場所
菊見つゝ話しは昭和へ遡る
無花果の味無花果に替え難く
二軒目の八百屋に在りぬラ・フランス
風邪ごゑの洩れて来たりぬ一軒家
折角の月の供へとなりにけり
麗しき石榴新作見る如し
バンドネオン這うて呻いて夜の秋
ピアソラのタンゴ魂露と凝り
晩涼のチェタンゴ・チェ終曲に
夜の底を曳きずり露けきバンドネオン
ぐちゅぐちゅになる柿みてくれとはちがふ

納棺の泪は菊の蕾ほど
ご霊前どんぐり大の涙粒
替刃して切れ味よろし文化の日
日付入り時計を買へり文化の日
歳時記の例句孫引き文化の日
二階にて目覚まし鳴りぬ文化の日
山茶花に洗濯物に注げる日
船腹をびたびた叩き鯨の潮
風入れや拝観靴の向き揃え
鯨釣の首に手拭い巻きつけて
神留守の八幡宮の楯の洞
産土の老若櫻紅葉して
フロントへ部屋鍵戻す文化の日
日差しにも奥行のある稲架襖
文鳥のこちそちこちに文化の日
来迎図公開しをる石露日和
雄弁に來世語り石露の花
めでたやの齡の老木さるすべり
石露浄土金ンのくしゃみをしたりけり
鯨釣れば鯨の眼をして浜の子等
木っ端臭くなりて戻りぬ枯木道
風入れの厨子佛の金ン石露の金ン
女郎蜘蛛金龍院の空を降り
金澤八景三石の一つ
文化財飛石風入れならねども
三石の飛石祀る寺紅葉
南無八幡神社の櫓もみずれり
街中の公園に来て帰り花
暖房具試し焚きしてきな臭き
神寂てもみずる櫓唯見事
枯れ木っ端臭さを払ひ除け起てり
初焚きの暖房音を耳にせる
グレンさん
老宇宙飛行士巡る紅葉どき
木の実落つ社奥行深くなる
暖房音横たわる身の上を越え
暖房音機材伝わりゆく音す
一通り紅葉し了へし庭の木々

冬の蠅平成の世を唯肥へて
神留守のまだもりあがりゐる傷口
どうかうもなく山茶萸の醜（しこ）もみぢ
暖房の音みしみしと試し焚き
椽巨木黄葉を透いて日の差せり
楯見事櫓も見事宮紅葉
十一月楯のはだへの親しかり
俳諧の師弟励むや花八つ手
面々授々以て対すや花八つ手
銭湯の板敷きひやと暮早し
立冬の眼鏡ほのぼの銭湯出で
脱衣籠すつぽんぽんになれと云ふ
極月のまた咳き込めば筋肉痛
花八つ手呑み込み闇がそこに在り
銭湯の歸途の細路地八つ手咲く
窓の間取りいろいろありて冬灯
柿落ちてたうたう一つ日の入り際
頼もしき蒲団を肩の早寝なる
猫を飼ふ人のことなど漱石忌
根深汁薬を飲んであと寝るのみ
狗尾草（えのころ）の魂（たま）のぬけが
ら枯月夜
水鳥の裡の喧し鳥鴨来（く）
水鳥の日がなびしやびしややってをり
烏瓜蔓は枯れ果てしまへども
就職難なんぞ知らずに浮寝鳥
大好きの妻の風邪寝の顔容

枯茄子孤獨絶景好奇心

トラトラトラ！耕衣俳句は奇襲もて

八つ手咲き家居日和と虻の云ふ

何事も先手取るべし十二月

書きとめてそれ清書して十二月

廚より湯を沸かす音冬に入る

物忘れ繰り言溜息秋深み

蔵相が出かけて行きぬ神無月

風邪猛威を振ふ老人予備軍に

冬物を著るといふより身を容るる

図書館へ初冬の日差し衣の上より

賀状出す凶案あれこれ思案月

ここに来て金貸し渋る枇杷の花

落葉風耳元掠めゆきにけり

唐突の真紅がよけれ猩々木

ポインセチア飾り立てつつ「主は来ませり」

さふらんの夢は夢とし咲かす夢

もみぢして只々見事主樗

古木さるすべり

幹艶に人としあれば生身魂

さふらんに天つ日溢れみたりけり

小春日に水栽培の根が出たか

鴟告ぐる外出日和よ出日和よ

おだてには乗ってみるもの猩々木

舗道の上鈴懸落葉這ふいぎる

新発意の朝のお勤め花八つ手

菊花賞菊に係わりなき人出

十二月廂にミニチュア金魚鉢

毎度のこと頭痛めて賀状書き

筆無精出無精年を越すばかり

ポインセチア十鉢ばかり景気付

七五三昇殿祈願列為して

引き連れて一族郎党七五三

付き添いの顔の晴れ晴れ七五三

油断して地を擦るまいぞ千歳飴

近在の浜っ子昇殿七五三

ぼっくりでしゃんしゃんとゆく七五三

日の差しておべべばかぼか七五三

室町水墨画展

渴筆に竹秋飲中八仙圖

型破り雪村見据え懐手

祥啓の耳毛の達磨お風入れ

渴筆に寒気狩野派雪村派

牧谿様鶴圖声無き声挙げて

蓮図

蓮の葉はくねる生き物小禽圖

牧谿猿蟹捕へんと身を乗り出す

師弟描く釈迦出山圖そぞろ寒

南禅寺所有達磨圖耳毛伸ぶ

滝に皺入りて雪村観瀑圖

蓮に鷺型を極めて吉祥圖

拾得が落葉搔きをる道釈画

布袋様布袋に冬着なども入れ

暮雪の軸雪村八十二歳筆

雪村

時雨描きと云はばや瀟湘八景圖

瓶から龍天に放てる呂洞賓

風入や脇幅として拾得圖

直伝の型歴然と蘆鷺圖

近景に巨岩を配す冬景色

女子を授かる

吉祥画甘草の朱を点じたる

一幅の天地爽やかに鳴鶴圖

金秋の花鳥走獸院体画

雪村を最眞厚着の学芸員

着膨れて解説雪村最眞かな

秋深く高士描ける双松圖

野毛山動物園

錦蛇暫し見てゐてのぼせけり

ホンドタヌキ檻の冬日を出入りす

描かるる初冬のジャガー微動だに

日向ぼこ水を抜かれしオットセイ

檻の鳥その上に色鳥来ては啼く

冬の日に駱駝の鼻先白っぽく
立冬の虎の太縞往き来して
化けたるは昔のことよ老狐
数え日のボア科のインドニシキヘビ
網目キリンに木の葉旋回して落ちぬ
木の葉降る月の輪熊の檻抜けて
手長猿ポーズをとりて日向ぼこ
フンボルトペンギン潜る冬日差し
夜行獣館落葉臭さに包まれて
空の檻二つ初冬の猛禽舎
爬虫類館にて
蝙蝠共々僕らの進化系統図
マレーバク枯葉食さぬものと見え
象の尾のぶらりぶらりと冬ざるる
檻に入りおこぼれ頂戴寒雀
冬日差す象にこゑ掛けチャイニーズ
野毛山の櫻落葉は日に反りて
野毛山の櫿の走り根秋寂びて
秋深み櫿の林の古根っこ
師走来と七面鳥の走り込み
蹠まで桃色初冬のフラミンゴ
止まり木と糞と冬ざれコンドルと
落葉籠アムール虎の檻の前
晩秋のアムール大虎横臥して
動物園移転の話冬隣
瞬いて冬の蠅追ふ駱駝かな
丹頂の上のユスリ蚊ゆらぎけり
蛇の衣水に浸かりて水脹れ
ワニガメの僕等は皆昼寝好き
祥啓筆
爽気充つ三角岩と直立松

日向ぼこ郷土史作家健在にて
郷土史に明るき人と石露の山
伊勢山へ浜つ子登る七五三
柿の家スウイングズビズバダバと
あれこれと荅の付き方菊盆栽
七五三伊勢山の坂きつくして

ユリ黄葉公園の空深まれり
エイと翻車魚見物客を二分せり
櫿の森栗鼠が団栗囓る音
天つ日に鈴懸黄葉鳴るごとし

擧散るコンクリート打ちバスターミナル

十二月下旬宴席三田・恵比寿

菓飲みさてそれからの暖房裡

十二月半ば頃より梯子酒

忘年会型にはまりぬ断りぬ

見えてゐるものが全てやいぼむしり

賞受けて賞におぼれじ狸々木

大挙してしし座流星群五更

もちきりの昨夜掠めし彗星譚

大接近ワクワクドキドキ流星群

流星は五つと俄天文家

紅葉山人語鳥語に匹敵す

日向ぼこ頭惚けて草の絮

受付に水栽培のヒヤシンス

山菜萸に赤き実付くを君知るや

蝦蛄仙人掌ほったらかしにいじけ咲き

綿々と文する勿れ言水忌

無造作に鈴懸木の葉落とす風

蕾む菊朝の冷気に弾け咲

当て字辞典当てなく開く冬籠

そこいらじゅう明るく石路の心がけ

石路咲くは小判の色と景気よき

金沢区社会福祉大会

シルバー介護公開録画十二月

福祉大会冬木たつぷり日を浴みて

福祉大会セーター匂ふ両隣

地区福祉功労者席木の葉髪

尿失禁予防体操着膨れて

てきばきと冬服匂ふ指話通訳

お腹から力がかかる謡初め

カトレヤに指話付き介護体験談

スキップで落葉舗道を横切れり

草の絮何時までつづく有頂天

てのひらで押さへて咳の震源地

ちよっとしたことではいさかい返り花

腹藏なき石路と石路との会話かな

ひよどりの目を逸らさずに実南天

風の日の落葉駆けをる朝の街

転がれる落葉溜りて日向好き

小雪の鳥ごゑ弾みをりにけり

長子次子働き者でけふ小雪

寒鯉の水押す力鈍りたる

鳥ごゑの弾ける如し白隠忌

けふの段取り朝の蒲団の中にて

二の酉と朝の蒲団の中で聞く

冬深む水栽培の根の針状

マフラーの無地旧友の為人

よく喋る女マスクで蓋をせん

故ありてなんばんぎせるは無頼の徒

落葉日に日に少くなりて朝の舗道

横転の仕方まちまちふう落葉

海外詠お盛ん

北極までだだっぴろくて俳筵

新年号用俳句を求められて

歳旦吟作り今からそんな莫迦な

ひざら貝冬ざるる身を張り詰めて

湯婆然身上相談回答氏

雀等も舌打ちをするこの寒さ

同人会忘年会と金嵩む

青檸檬疲れが出たか色檸檬

一曉雲沓てつく空の一角に

先生の墓守る友も逝き秋蟬

鈴懸の尾羽うち枯らすまで落葉

裏返す新聞の音文化の日

霜降るといふ遠望の目付して

すつと差す朝日まみれに寺黄葉

並木道つむじをなせる落葉風

花八つ手瞬くやうに朝が来て

百鳥がちやほやするから山毛櫟黄葉

偏屈な木守柿などと訝られ

冬着着て皆顔見知り今朝の車中

檻隣りホンドキツネのお忙氏

郁子などと語感からして先づ根暗

丹頂に日本の色極まれり
立冬の榊瘤だらけ宮参り
山茶花咲く空気に張りのありにけり
山茶花のこらえきれずに散る刹那
鴨泳ぐなどと体裁よき言葉
水鳥の水破る音夕間暮
柄物を装ふ女鴨シツクなり
鴨着水ざんぶとやってみせにけり
弘明寺十一面観音立像
木の実どき鑿目を残す観世音
十一面もって見守る凍み観音
楷樹黄葉文庫は唐物展示中
称名寺絵圖に池あり木の実どき
六浦に三艘といふ地名ありて
唐物を揚げし湊や秋風裡
木の葉髪魅入る宋版一切経
宋よりの木の実色せる一切経

枯葉打ち通り一辺倒の雨
 厚着して俳句はこの眼この脚で
 冬着など十一月のこゑ聞いて
 梅雨空の突つかえ棒の外れ月
 爛酒にさようさようと応ず人
 年越しの等身大の句をたんたん
 火柱となりしとんどにしりごみす
 日曜日真中に挟み紅葉狩り
 力んだりするから額縁歳旦吟
 壁いちまい抜け来る咳に力あり
 ドンと底つけり景氣のわるき年
 蟻螂の首筋掴み得意なり
 幼な子の見て見て見ての草もみぢ
 古樫若木共々健在なり
 裸木にして古樫健在なり
 午の日差し櫻紅葉をあたたむる
 朝の日に嬉色満面石露の花
 樫にもいろいろありて宮紅葉
 白雲木の枯葉三角日に反りて
 コアラは初冬のユーカリの葉をよく噛んで
 カタカナの熊がよめる子檻の前
 動物園の伝言板を木の実打つ
 動物園おにぎり組に木の葉舞ふ
 ユーカリへ冬日尋常ならぬ景
 着膨れのコアラの横木の掴まり方
 むかご採りに来て遅かりし由良之助
 葉並びは抜群桂照黄葉
 むかご皆落ちて仕舞へり昼の月
 枯れ藪にむかご零るる音の行方
 白き実のなんきんはぜに夕早し
 烏瓜どうせ採るなら器量好し
 体重の乗せ方上手日永象
 櫟黄葉がやがやごゑの山上る
 枯るる中熊しで次の芽を持てり
 溪流に熊シデ冬芽起しけり
 むかご落つ彼方にマレーバク眠る
 県庁前落葉は音を曳きずりて
 トーテムポール空に聳える黄落期

メーブル落葉トーテムポールの空よりす
 木の実落つダーウィンレアは真顔にて
 へべれけのお手を拝借年忘れ
 罷り出て精霊飛蝗の御曹司
 雨戸越し霜に驚く母のこゑ
 気骨あるその歩きぶり羽抜鳥
 裸木の一枝毎の濡れつぶり
 城山は今落葉山日当れり
 内海や貼り絵の如き蜜柑山
 阿佛尼に小町通りの草もみぢ
 首筋のすうすうオーバー羽織り初め
 手を組んで目つむる車中極月へ
 止まらない咳に代りてももの云ふ眼
 山崎方代に 一度だけ本当の恋がありまし
 て南天の実が
 知っております の歌あれば
 恋すてふ南天の実と方代と
 小雪と云ふ日の朝の吐息なる
 水腎症なりと
 水浸し駄目腎臓に屠蘇供え
 大幅に賀状絞るか思案月
 真っ直ぐに吹いて来るなり冬木道
 新年を迎へる楯の瘤だらけ
 オーバーを出して着る日のけふよりぞ
 枇杷の花承知する事しない事
 割り込まるその余波が来て暖房車
 極月の絆創膏をぎうと貼る
 立て込んで検尿 採血 咳 患者
 病院の霜降る朝の赤ポスト
 梅鶯の南部坂聴き早師走
 梅鶯節こころにずしり年惜しむ
 しつこき蚊御用とばかり平手打ち
 帰り咲く花請け合うて雪柳
 耐寒性さくら草にて花果敢
 金目鯛よく見る為の大きな目
 まはりから徐々に片付き木守柿
 生きること即ち芸よ年酒酌む
 野暮天を絵に描いたやう花仙人掌

腹決まることが大事よ蕪汁

初夢にお他力様の初仕事

白木槿我に手のなしなんんだぶつ

プールサイド雨の落葉のわっさわっさ

寝支度の電気毛布をぬくめに行く

採尿の尿足らざるや暖房棟

枇杷の花葉切れしと出かけ来て

● HAIKU199812sono2

半島の西側夕焼けウオッチング
初詣羽田航空神社かな
時代少しづらし生き来て吾は辰年
かいくぐる鳩を見ながら湖西線
羽ばたきの訝湖尻の一寒村
梅檀の木の実尾長の眼に溢れ
半ばより後は駆け足十二月
押し出しのおのづからなる枯柏
漬けしこと忘れてをりし木の実酒
酢茎出て四条河原に近き宿
目の覚めてここ一番の寒さとも
まがひもの満ちあふる世に龍の玉
落葉の上落葉音立て比叡山
機敏なり電子画像の熱帯魚
脱落の落葉始まる南側
寺町の八つ手の花に又遇へる
滝桜幹に食い込む杭も枯れ
数え日の雑用買って出ること
数え日の本の片付け小半日
煤掃の寺を目当ての旅納め
懐古 寺前神社大銀杏
野分に巢投げ出し公孫樹ぶっ倒れ
石露咲いて建前日和いよいよや
漁師村その裏山の寒鴉
絹莢の蔓枯れ笹の音聞きて
芙蓉の葉食むは一体如何な虫
ゑんどう伸ぶ正月前の砂畑
市民農園絹莢白き花つけぬ
手つかずの谿に分け入り自然薯堀
汽水池鴨を数えに午後も来て
鴨仲間午後の中州に又増えぬ
鴨の名にいやに詳しき女あて
じたばたのじたの師走のちんどん屋
じたばたのばたの大つごもりなるよ
ほかならぬ妻の頼みの煤払ひ
一ツ火の大事を前の咳払ひ
作句力何時しか衰え枇杷の花
森澄雄大明神の年の瀬吟

濁り酒どすんと一升瓶を置く
一は彩二は取り合わせ宮紅葉
散り癖のいろいろありて梅もみぢ
烏瓜うねり下れる川の艶
初旅の日数やりくりしてつくる
義士祭り
夕鴟啼く大高源五の墓向ふ
神崎与五郎
とつつきは与五郎の墓義士祭
名を惜しむ四十七人(たり)義士祭
高張を要所要所に義士祭
幸運の小槌よく売れ義士祭
炒り立てのぎんなん買へり義士祭
堀部安兵衛
安兵衛へ忌日の線香てんこ盛
線香の煙にへどもど義士祭
義士祭り有象無象のなみあみだ
甘酒に腹を温めて義士祭り
高張に松の浮彫り義士祭り
煙の中義士討ち入りの日なりけり
句をつくるはた又授かる太郎月
それはまたそれでけっこう長火鉢
付録にはいつも付きぬし福笑
刃傷沙汰ありし生麦霜降りぬ
鴨群るる湖上に比良組比叡組
湖上に降る鴨の比良組比叡組
殲滅の白山茶花でありにけり
在りやうのこれより俄枯柏
そこそこに華やぎ梅のみぢせり
鳩は潜水精進吾は句精進
大年の櫂に向ひ二た三言
水腎症と判明
迂闊にも梅雨の腎臓一つ駄目
黄昏が一気に銀杏落葉掻
檸檬とある日落ちて処遇の善後策
暖房車本を開いて丸暗記
初仕事あてがひぶちの世の遠く

皆生きて霞みて冬を籠るなり
洋梨の手ざはり買ふと決めにけり
百千の鴨の一つとなり湖上
ぶつからぬやうに鴨立ち鴨降りぬ
おどけ見せ落葉時雨の勘太郎
金魚の朱ぼおっといわさきちひろの絵
さふらんの色を通せるちひろの絵
りゆうのめのなみだのいろの芋のつゆ
一日の時報に時計合はせたる
大楯の慥然と年を迎へけり
鳴神のがなりたてゆく相模灘
水仙花は二面観世音は十一面
セロリ食ふ世代にあらざ誕生日
買初めの新刊二三出来ごころ
鴉望む堅田辺りの景愛す
腎臓の疑ひまさか落葉みち
羽子板市がさ市
賈物の餅花なれど福は福
傾城も手玉に取られ羽子板市
売り顔も商ひの内羽子板市
一生もの羽子板なりと売り口上
志ん朝の買札付きぬ羽子板市
横顔の誰ぞに空似羽子板市
羽子板市都内ツアーに組み込まれ
山東京伝机塚句碑 耳もそこね足もく
しけてもろともに世にふる机なれも
老たり
落葉もて机塚埋めん合点じゃ
机塚あたじけなしの冬日差し
ちよつくら前ごめんなすつて羽子板市
二代目も笑顔で対す羽子板市
灯が点いて寝ずの商ひ羽子板市
客の袖挿み羽子板売り口上

一回りして元の店羽子板市
角店の助六よかり羽子板市
貧乏神の退散希ふ初詣
いっぽんの聖樹水上バス船尾
都鳥今も跳ねをる勝鬨橋
水上バス船尾の聖樹瞬けり
都鳥ついと寄り来る散策路
初日から晴れに恵まれ羽子板市
弁慶の睨み利かする羽子板市
橋越へて水もしたたる都鳥
年の瀬の鶇の女ごゑ芭蕉庵
羽ばたくは浮寝の鴨か芭蕉庵
銀行前不景気風に落葉舞ふ
平成の景気はどうだと助六羽子板（いた）
神棚の値切り落とさる年の市
客寄せの口上達者羽子板市
すといとんと都鳥上げ国技館
がさ市の束なす日差し穂俵へ
羽子板の値踏み群がる頭越し
ねずみ小僧見得切る羽子板それがよし
白浪ものお嬢吉三の羽子板市
羽子板市初日の板を買ひなんせ
百合鷗ぱつと散らして着岸す
大羽子板大将値切り落としけり
伝法院通り堀越え落葉風
仕込帳傍らに置き羽子板市
置炬燵出てがさ市の客相手
がさ市の戻りがてらの味噌トンカツ
大玻璃戸自慢の家の冬紅葉
烏瓜惚け初めたるはねず色
好き嫌いの見立て帆立も芸の内
不随筋心臓縮む寒さかな
心臓の鼠鳴きする寒さかな
至福なる曉蝸を二度三度
寒がらす詠み句作りの腹ごしらえ
空咳を一つ堅田の寒鴉
椿咲くここ鎌倉に虚子一門
虚子一族萌ゆる鎌倉引つくるめ
冴えかへる鎌倉ぐるみ虚子一門

懐旧

寄生虫退治や生々にく鶉呑み

侠客の鮎にしらじら谿明くる

停年を色もて云へば深川鼠

心臓がびくんと尿に起てば寒気

御納戸茶色の晩年待ったなし

幡随院長兵衛鮫を見にゆく冬

コンピュータウイルスに爛れ液晶梅雨

潤目鰯の硬さご飯のあたたかさ

一病を持ちて海鼠の類ひなる

酒やれば風が募りて松葉蟹

老ひらくの斯くはありたし芙蓉の実

枯蔓は声無き声を断末魔

懸命に暗黒照らす提灯鮫鱈

さそひには口を濁して年忘れ

昼の間減りたる家の掃納

師の句には遠く及ばぬ葛湯かな

吾妻橋たもとこれなん都鳥